

2022年8月1日

みずほディーラーズアイ (2022年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリンギ相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 128.00 ~ 138.00

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

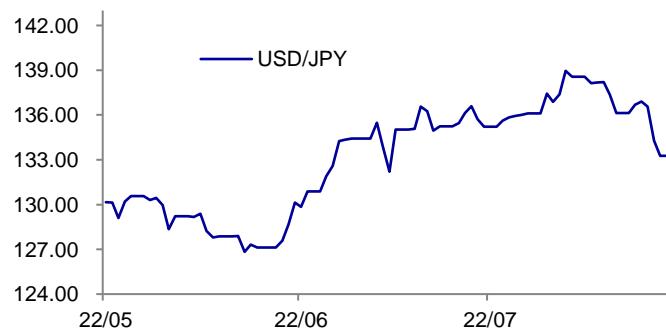
■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は24年ぶりの高値水準まで円安が進む展開となった。月初から米経済のリセッションリスクに対する警戒感が強まり、先月安値の134.75円まで下落。翌週4日、135円ちょうど付近でオープンしたドル/円は、バイデン政権による対中関税の一部撤廃期待によるリスク選好地合いもありじりじりと上昇。その後も、米6月ISM非製造業景況指数の結果や、景気よりインフレ抑制を重視する姿勢を強調したタカ派的なFOMC議事要旨にドル買いが加速し135円台後半での推移となった。8日には、安倍元首相の襲撃を受け円買いが強まり135円台半ば付近まで下落する場面も見られたものの、米6月雇用統計が予想外の好結果となったことを受けて底堅い動きとなつた。

翌週も堅調な動きが継続。参院選の結果を受けた政権安定運営を見越し、株式市場の上昇とともに買いが先行。137円台にのせた後も、世界的な景気減速懸念から、他通貨が下落する動きにドル買い優勢の流れが継続上値を切り上げる展開となつた。13日に発表された米6月CPIは市場予想や前回を大きく上回り、ドル買い反応となつたことで137円台後半まで急伸した。14日には、138円の底堅さを見極めた実需のドル買いや時間外米金利の上昇を手掛かりとして急上昇。139円乗せとなり、約24年ぶり高値を更新する展開となつた。15日の週末は、高値更新の達成感からドル買いが一巡すると、中国第2四半期GDPの弱い結果も相俟って138円台半ばまで調整。米7月ミシガン大学消費者信頼感指数のインフレ期待が低水準となつたことから、100bps利上げ期待がやや後退し138円台前半まで下落して推移した。18日の週は上昇が一服。週初、27日開催予定のFOMCで+100bpsの大幅利上げ期待が後退したことで137円台後半まで値を下げ、じり安の展開。21日の日銀金融政策決定会合にて現行の金融緩和維持と黒田日銀総裁によるハト派的な発言を背景に、日米金融政策の方向感の違いから円売りが強まり、138円台後半まで上昇するも、その後発表の米7月フィラデルフィア連銀景況指数等、複数の米経済指標の冴えない結果に再び反落した。

最終週は、週後半に急落。FOMCでは市場予想通り+75bpの利上げを決定も、次回会合での大幅利上げは今後のデータ次第というパウエルFRB議長の発言に136円台前半まで下落。週末にかけては、米4~6月期GDPの冴えない結果や米金利低下を受けて軟調地合いが継続。一時は132円台まで続落した。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	米ISM製造業景況指数	6月	54.5	53	56.1
7/6	米ISM非製造業景況指数	6月	54.0	55.3	55.9
7/8	米非農業部門雇用者数変化	6月	265K	372K	384K
7/8	米失業率	6月	3.6%	3.6%	3.6%
7/13	米CPI(前年比)	6月	8.8%	9.1%	8.6%
7/14	米PPI(前年比)	6月	10.7%	11.3%	10.8%
7/15	米小売売上高(速報、前月比)	6月	0.9%	1.0%	-0.1%
7/28	FOMC政策金利		2.50%/2.25%	2.50%/2.25%	1.75%/1.50%
7/28	米GDP(年率/前期比)	2Q	0.4%	-0.9%	-1.6%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル/円 見通しまとめ

ブル	11名	138.00 ～ 130.00	ベア	7名	135.00 ～ 130.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

矢野	ベア	135.00 ～ 130.00	米国ではインフレ抑制に向けた追加利上げが展望されるも、雇用以外は先々の景気に不安を感じさせるものとなりつつある。今月は国内ではお盆等により流動性が低下することもあり、足もとの地合い悪化により上値の重い地合いとなろう。
牛島	ブル	140.00 ～ 130.00	7月後半は米金利の調整とともにドル円は調整局面となったが、デイップは深くないと見る。今後もFEDが利上げを継続する限り、米金利の低下基調は近いうちに一巡し、ドル円は再び140円を目指す展開となろう。
筒井	ブル	139.00 ～ 132.00	商品価格が急騰しない限り、高止まりすれど、これ以上のインフレ高進はない。FEDは75BPではなく25BP毎の利上げペースに戻る。日米金利差からドル円の下値は堅い一方、上値を突き抜ける材料もない。
加藤	ブル	136.20 ～ 131.00	年後半は早めの調整局面入り。明らかなオーバーキルで、クロス円を中心に積み上げた円ショートポジションの巻き戻しを想定。ただし絶対的な利回り格差は残存し、調整スピードもそれなりに速いことから8月は調整の調整で若干のブル相場。
山崎	ブル	137.50 ～ 134.00	ドル円は新たな材料探しに一旦調整局面入りか。すでに7月末にかけて調整されて135円付近まで下落したが、日米金利差が絶対値として存在する限りは引き続き上昇圧力は根強く、底堅い推移を予想したい。
伊藤	ブル	139.00 ～ 131.50	高止まるインフレ抑制にFEDのタカスタンスに変化なし。引締め加速による経済減速懸念がインフレ期待を低下させているが、環境不变なら米金利下落余地もあまりない。今後のデータ次第だが、ポジション調整一巡後は再度上昇すると予想。
山岸	ブル	138.00 ～ 130.00	インフレピークアウトによる米利上げ打ち止め観測は時期尚早。また日銀はインフレが供給サイドに留まり緩和姿勢を崩さず、ドル高円安基調は継続そうだ。資源高による本邦貿易収支の悪化も、需給面の円安要因で短期解消は見込みづらい。
尾身	ベア	136.00 ～ 131.00	今月は131～136円のレンジ推移を予想。日米の金融政策差を背景としたドル高円安基調は継続していると考えているが、米国のリセッション懸念やインフレピーク説がドル相場の上値を重くするのではないか。
甲斐	ベア	135.00 ～ 130.00	足元高まったリセッション意識から、短期的にはドル売り地合い継続を予想。50日移動平均線を明確に割り込み、上値の重さが意識される。ただ、日本の状況は不变であり、9月に日本だけがマイナス金利となるため、下げる幅は限定的か。

小野崎	ブル	139.00 ～ 130.00	7月末に大幅に下落したドル円は調整の好機となった。米リセッション懸念は気になるものの円買い材料にも乏しい中で130円前半は買い場。ただし、FRBの利上げを背景にした米金利上昇も一服しており高値更新とは見込みがたい。
原田	ブル	138.00 ～ 128.00	先月の上昇一辺倒からは一服するものの、引き続き日米の金融政策の方向性の違いが意識されることや、夏休み期間に入り、米国株式市場のサマーラリーなどでリスクオンに傾く可能性があり、ドル円は底堅い推移を見込む。
上遠野	ベア	135.50 ～ 127.00	7月FOMCをこなし、次回会合以降の利上げペース縮小観測が強まる中で米金利は頭打ち、米経済は悪化というドル両面ドル売り材料。米日金利差も縮小し積みあがった円ショートアンドワインドが強まり、ドル円は下値を探る展開か。
小林	ブル	137.00 ～ 128.00	7月末にかけて米リセッション懸念を背景に急速なドル売り相場となつたものの、株価は堅調推移を継続。売り一巡後、米債利回りも回復局面に入ればドル円は再び上値を追う展開となろう。
逸見	ベア	135.00 ～ 130.00	Fedのタカ派スタンス後退やリセッションリスクが意識され、3月から継続したドル円の上昇トレンドは一旦、崩れた格好。一本調子で上げてきたこともあり、8月は調整の時間と考える。
大谷	ブル	138.00 ～ 130.00	7月後半のドル円相場は調整する展開となったが、FRBがインフレ抑制を重視するスタンスには変化なく、調整一巡後は再度ドル買いの展開を予想。また、米株式市場の調整が一巡しつつあることもドル円には追い風になると考える。
鈴木	ブル	137.00 ～ 131.50	FOMCの利上げペースの落ち着きやリセッション懸念を背景に、一旦ドル高は小休止。やや上値は重くなりそうだが、日銀との金融格差は依然として大きく、調整は一時的、ドル円は底堅い推移を予想する。
木村	ベア	136.50 ～ 129.50	7月のFOMCで75bpsの利上げが実施されたが、同規模の大幅利上げは今後は期待しがたく、4月以降積み上がった円売りを利食いの動きが出やすいと思われることから軟調推移を予想。
大熊	ベア	135.00 ～ 130.00	足許の経済指標の悪化により、米景気の先行き不透明感が高まっている。利上げは年内で打ち止め、来年には利下げに転じるとの見方が高まっていることからも米長期金利は低下傾向にあり、ドル/円は下値を模索する展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ:

EUR/USD 0.9500 ~ 1.0500
 EUR/JPY 133.00 ~ 142.00

金融市場部 グローバルFIチーム 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

先月のEURUSDは月前半は欧州経済不透明感から急落する展開にパリティ割れとなるも、後半はECBによる50bp利上げによりやや切り返す。月初は1.040台半ばで推移したが、5日欧州経済を巡る先行き不透明感が広がる中、独エネルギー会社の債務不履行懸念や欧州債利回り低下を背景に約20年ぶりの安値水準となる1.020台半ばへ急落。一方、良好な米経済指標やタカ派的な内容のFOMC議事要旨が公表される等によりドル買い優勢な中、週末にかけて断続的に値を下げる8日は一時1.01付近まで下落した。翌週もその流れは引き続き、各国中銀による金融引き締めによる景気鈍化懸念の高まりに加えて、ユーロ圏のエネルギー供給問題が引き続き、断続的に値をさげた。12日は独7月ZEW景況感指数の冴えない結果が重となり、一時パリティ割れ寸前まで下落。その後、一時値を戻すも、13日には米インフレ指標の強い結果にユーロ売りが強まる、一時的に約20年ぶりにパリティを割り込んだ。その後は再び持ち直し一時1.010を回復するが翌14日には再び下落し再びパリティ割れの0.9952まで急落。その後は週末にかけてFRBの大幅利上げ観測の後退などにより1.010付近へ上昇。翌週からは切り返しの動きとなった。前週末の流れを引継ぎ18日に1.020付近まで上昇すると、19日には欧州債利回り上昇から1.020台後半まで急上昇。21日に予定されているECBでの利上げ期待を背景に1.020台半ばでの値動きが続くも、20日のユーロ圏7月CPIがさえなかつたことやイタリアの政局混迷が重じとなり1.01台半ばへ下落。迎えた21日のECB開催日では、ECB前のヘッドラインでロシア・ドイツ間の天然ガス供給再開のヘッドラインを受けて上昇する中で、ECB政策理事会で2000年6月以来、約22年ぶりとなる+50bp利上げが決定され一時1.0279まで急伸。ところが、その後のラガルドECB総裁による「最終的な金利水準は変えない」との発言に1.020を割り込む水準へ下落するも、その後は1.020を挟んだ値動きが続いた。月末週は1.020台での値動きが続くも、26日にロシアが欧州に対してさらにガス供給を制限するとの発表に欧州債利回りが下落すると、1.01台前半へ急落。その後27日のFOMCで会合後のパウエル議長の記者会見でハト派的と受け止められる展開に上昇に転じて1.020台を再び回復した。28日に欧州7月景況感の低下などで再び1.01台前半へ急落したが、その後に米第2四半期GDPが予想0.4%に対して▲0.9%と発表されると切り返して月末日にドル円が急落する動きに上昇を続け一時的に1.0250付近に到達した。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/6	独製造業受注(前月比)	5月	-0.5%	0.1%	-1.8%
7/7	独鉱工業生産(前月比)	5月	0.4%	0.2%	1.3%
7/13	独CPI(前月比)	5月	0.1%	0.1%	0.1%
7/19	欧CPI(前月比)	6月	0.8%	0.8%	0.8%
7/20	欧消費者信頼感	7月	-24.9	-27.0	-23.8
7/21	ECB主要政策金利	7月	0.25%	0.50%	0.00%
7/22	欧州マーケット製造業PMI	7月	51.0	49.4	52.0
7/25	独IFO期待指数	7月	83.0	80.3	85.8

(資料) ブルームバーグ

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	6名	1.0500 ～ 1.0000	ベア	12名	1.0400 ～ 0.9900
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

矢野	ベア	1.0300 ～ 0.9900	前月は約20年ぶりとなるパリティ割れとなつたが一段安とはならず。「インフレ抑制に向けた利上げの思惑」と「ロシアからの天然ガス供給不安に伴うドイツをはじめとする景気悪化懸念」の睨み合いかから上値の重い地合いが続こう。
牛島	ベア	1.0400 ～ 0.9800	欧州天然ガスが高止まりし、ガス供給問題がドイツ等の景気に悪影響を与えるとともに、域内格差問題がハイペースの利上げを阻害する。FEDが淡々と利上げを続ける中で、ユーロは弱含み再びパリティ割れを目指すと見る。
筒井	ベア	1.0350 ～ 0.9600	欧州圏経済はstagflationを深めていく。マイナス金利を解除したことでECBは利上げを中止し、経済状況を観察すると共に周辺国債券対応に注力するだろう。米金利との差は拡大し対ドルでの下値を探る。
加藤	ブル	1.0500 ～ 1.0100	ウクライナ問題がどれほどユーロ圏貿易に悪影響与えているかが鍵、米国との利上げ競争に関しては、米国より様子を見ながら徐々にシフトを上げていく公算で、実体経済へのネガティブインパクトを考えると悪影響が小さく済む。
山崎	ベア	1.0350 ～ 0.9950	ECBは政策金利引き上げ、インフレ対策を強調。パリティ割れから持ち直しているが、欧州は問題山積となっている。伊の政局や利上げの各国への影響、ロシア天然ガス問題。一旦は持ち直すも、経済の不透明感からじり安を予想。
伊藤	ベア	1.0400 ～ 0.9700	高止まるインフレ抑制を第一に考えるスタンスはFEDも同様だが、ECBには域内分断化リスクも付きまとう。加えて、エネルギー問題からの景気後退懸念も意識される中ではEURに対する見通しはネガティブにならざるを得ないか。
山岸	ブル	1.0600 ～ 0.9900	ECBはインフレ抑制重視の姿勢が鮮明。来年初めまで継続的な利上げ観測あり、ユーロは底堅い展開を予想。インフレ率は域内6～20%で濃淡、財政状況も異なり、金融政策の難度高いが、TPIでコンセンサス得て、タカ派を堅持か。
尾身	ブル	1.0500 ～ 1.0000	ECBの利上げがユーロの上昇をサポートすると考えている。一方で、欧州ではエネルギーの問題や利上げによる景気鈍化懸念なども強く、ユーロ/ドルの上昇は限定的となるのではないか。
甲斐	ブル	1.0350 ～ 0.9950	7月のECBでマイナス金利は解除されたものの、次のECBは9月。足元高まっているリセッション意識は、むしろ欧州の方が懸念される状況。ロシアにガスの元栓を握られている状況は変わらず、ユーロ売りにも留意は必要か。

小野崎	ブル	1.1000 ～ 1.0000	今後の利上げ姿勢が明確な欧州。ウクライナ情勢も懸念は続くがマーケットテーマとしては一巡。FRBの利上げも織り込まれる中、ECBの利上げ姿勢を背景にEUR買いを見通す。
原田	ベア	1.0600 ～ 0.9900	ウクライナ情勢などユーロへの重しは引き続き継続。ECBはついにマイナス金利を脱したものの、米国のか強い利上げにも影響され、ユーロはじり安を予想する。
上遠野	ベア	1.0300 ～ 1.0000	ロシアからの天然ガス供給問題に加え、記録的な猛暑もエネルギー環境を逼迫させ、利上げ初期段階にしてstagflationリスクが表面化。ECBの新たなプログラムTPIも効果は限定的とみられ、正常化プロセスは厳しい道程。
小林	ベア	1.0400 ～ 1.0000	ユーロ圏における景気減速や、イタリア政権問題、ウクライナ情勢による地政学リスクなど、積極的なユーロ買いはまだ考えづらく、8月も引き続きユーロの軟調推移を予想する。
逸見	ベア	1.0400 ～ 0.9800	インフレも然ることながら、天然ガス供給問題をはじめ、地政学リスクの影響を強く受ける欧州地域の経済減速懸念は米国対比深刻な状況と考えられ、ユーロは上値の重い展開を予想。
大谷	ベア	1.0400 ～ 0.9800	ユーロ圏の景気後退は根強く、また域内の天然ガス供給を巡る不透明感やイタリア総選挙等の地政学リスクも燐る中、積極的にユーロを買う地合にはなりづらいと考える。8月も引き続きユーロは上値重い推移を予想。
鈴木	ベア	1.0400 ～ 1.0000	利上げは実施したものの、今後のペースについては不透明感が強い。天然ガス供給問題やイタリアをはじめとする政局不安など、ネガティブな材料が依然として多く、上値の思い展開か。
木村	ブル	1.0500 ～ 1.0000	7月にパリティ割れを試したが反発し、ECBもインフレ抑制を優先して金融引き締めを継続する姿勢を示したため再び下値トライはやりにくい地合。レンジ相場から方向感を探る展開か。
大熊	ベア	1.0350 ～ 0.9950	ロシア産エネルギーの供給問題は早期に解消される可能性が低く、需要が増加する冬期入りを控えてECBは金融政策正常化を進めにくくなる事も考えられる。イタリア政局の不透明感も重じとなり、ユーロは再びパリティ割れを窺う展開か。

英ポンド相場

予想レンジ:

GBP/USD 1.1800 ~ 1.2200
GBP/JPY 160.00 ~ 168.00

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

■ 先月の為替相場

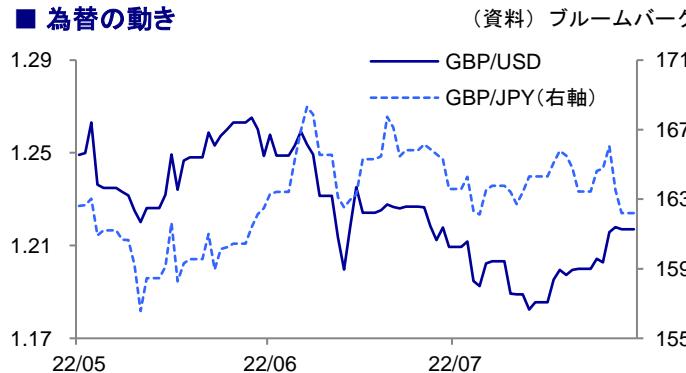
先月の英ポンド相場は、月初対円と対ドルで下落基調、対ユーロで上昇基調での滑り出し。中旬から月末にかけて、対円と対ドルではポンドの買戻しが進行し、下に向って来いの展開。対ユーロに関しては、月初オープンの0.8650レベルから5月以降のサポート水準である0.84まで対ユーロでのポンド買いが進行。

月の前半は、堅調な米指標を背景に、FEDの利上げ期待が高まり、主要通貨市場ではドル買いが優勢。その中で、ロシアからのガス供給問題といったような欧州圏におけるリスク要因からユーロの売りが特に強く、パリティを割れる水準まで大きく下落。ポンドについても、ドル買い地合いのなか1.20を明確に割れ、一時1.18割れの水準まで下落。

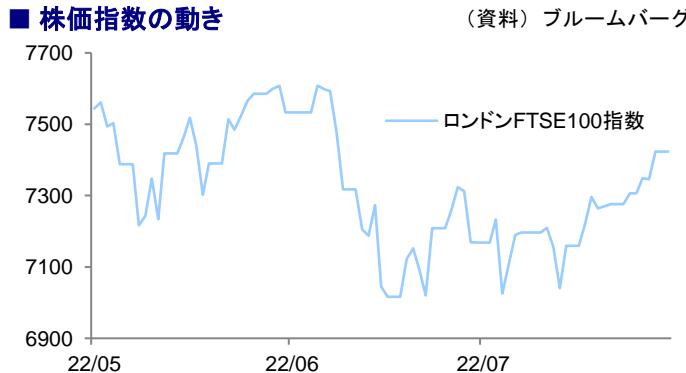
ドル要因とは別に、ポンド安に働きかけたイギリス固有の要因は、5日に発表された英財務省スーナク氏と英保健相ジャヴィド氏辞任が挙げられる。その後、ユーロドルの反発や英中銀ベイリー総裁が次回8月の金融政策決定会合において25ベーシスポイントを超える利上げを行う可能性を示唆したことを受け、英ポンドは対ドルで1.19台、対円で162台後半まで戻す展開。18日のポンド上昇については、英中銀金融政策委員会ソーンダース委員の「英中銀政策金利は2%以上に上昇する公算が高い」との発言がきっかけになったと思われるが、8月で退任予定の当員会の発言によるマーケットへの影響は限定的であり、ポンドの上値は押さえられた。

21日以降は、米7月のフィラデルフィア連銀景況感指数が予想対比を大幅に下振れたことで、米景気減速懸念から米金利は低下。為替はドル売り地合い。ポンドについてもじりじりと値を戻し、1.20台を回復。27日のFOMCでパウエルFRB議長が利上げペースの鈍化に言及しドルが売られるポンドは買われ、28日には1.21台後半で取引が始まる。その後は上値重く1.21付近まで押されるが、午後に米第2四半期GDP(前期比)が予想を下回りマイナス成長となると米金利の低下にドル売りとなり再びポンドは1.21台半ばへ上昇し月末を迎えた。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 今月の見通し

今月のポンド相場は、1.20台を挟んだレンジ相場を予想。ポンド固有の材料としては、4日の英中銀委員会の発表が注目される。7月27日に本稿を執筆している時点では、0.50%の利上げがコンセンサス。ベイリー総裁が19日に、英国の10月のインフレ予想が11%越えになっていることを背景に、次回会合(8月会合)で0.50%の利上げを示唆したことが背景。利上げ織り込みの高まりを受けてポンド買いが強まる局面も見られたが、50ベーシスポイントの利上げは利上げの「前倒し」に過ぎず、利上げサイクルにおける最終ターゲットの上昇を意味するものではないと市場が解釈したからであると考えられる。

同発言後の金利先物市場の動きを見ると、ポンドの利上げサイクルのピークアウトが19日時点では23年6月会合において3.11%織り込まれていたのに対して、22日(市場が同発言を消化後)時点、利上げのピークは23年2月会合まで4か月前倒しされた。加えて、最終利上げ地点についても2.90%まで0.2%の低下。8月会合は既に50ベーシスポイントの利上げが織り込まれていることから、ベイリー総裁がハト派的な発言をした際に年内の利上げ織り込みが低下し、ポンドが大きく売られるリスクには注意しておきたい。

続いて、9月まで続く保守党党首選の動向にも注意しておきたい。現時点

で、保守党員投票ではトランプ外相の優位が伝えられるが、同相は、代替

財源のない減税(+増税取り止め)方針と合わせ、インフレ抑制のために「日本を見習うべき」と主張しており、その経済政策運営手腕には大きな疑問符がつくと考える。今後の世論調査結果などを見守る必要があると考えられるものの、大枠としては、スナク前財務相優位ならポンド堅調、トランプ外相優位ならポンド軟調を基本シナリオとすることになるのではないか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

オフィスを出てセントポール寺院を抜けると、駅前にBOEがそびえ立つバンク駅へと繋がる。バンク周辺に勤める日本人駐在員行きつけの散髪店が店を構えるのもこの辺りだ。美容師の一人であるMが会員で、渴いた喉を潤すために僕らはパブへと足を運ぶ。ビックリア朝の入り口を抜けると、ピンボールに夢中な若者、フットボールの試合で熱くなる聴衆、職場の仲間で盛り上がる人々等、公園で遊ぶ子供のように、ペイントグラスを片手に大人たちが思い思いの時間を過ごす。こんな時代だからこそ、パブのカウンターに刻まれたピースマークの落書きも、心に刺さるものがある。「アバ、アバ、アルセントロ、アルデントロ。」いつもの号令を皮切りに、薄汚れたショットグラスに注がれたテキーラが僕らの1週間の疲れに襲い掛かる。これが、"青空を飲む会"のいつも通りの始まりだ。夏の屋外で飲むと、グラスに注がれた酒に青い空が映り込む。空を飲むような感覚を覚えることから、このように名付けられた。残念なことに、ロンドンでは青空を飲むことのできる期間はとても短い。気分を良くした僕らは、タワーブリッジを渡りテムズ川の南へと移動する。道中、通り掛かりのパブでビールを続けて引っ掛けいれば、思わず行動に出る者がいても不思議ではない。いまでも、路上を馬に乗ってパトロールする警察の姿を目にすることがある。37歳のKは、馬の姿に触発され、僕らの背中を馬跳びの要領で飛び始める。結果は、想像に難くない。「まだまだ、若いですよ。髪の毛は。」次に辿り着いたパブで、ひびの入った眼鏡を労りながら身体の衰えを憂うKを、美容師のMがテキーラを渡しながら慰める。慰めの報酬はいつも、彼の独唱となる。SOHOに店を構える日本人行きつけのカラオケボックスEPOCで、彼の歌う玉置浩二に僕らは癒される。きっと、いつの日か思い出すことだろう。今日のようなロンドンでの当たり前の日常を。あの頃は何もなくて、それだって楽しくやった、と。ビッグベンの針が0時を指す頃、まだ収まらぬ余韻を胸に、僕らはそれぞれの

戻り

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	53.4	52.8	52.8
7/5	サービス業PMI	6月	53.4	54.3	53.4
7/6	建設業PMI	6月	55.0	52.6	56.4
7/13	GDP(前月比)	5月	0.1%	0.5%	-0.3%
7/13	鉱工業生産(前年比)	5月	-0.3%	1.4%	0.7%
7/19	ILO失業率	5月	3.8%	3.8%	3.8%
7/20	小売物価指数(前月比)	6月	0.80%	0.90%	0.70%
7/22	小売売上高(除自動車燃料、前月比)	6月	-0.40%	0.40%	-0.70%
7/22	製造業PMI	7月	52.0	52.2	52.8
7/22	サービス業PMI	7月	53.0	53.3	54.3

豪ドル相場

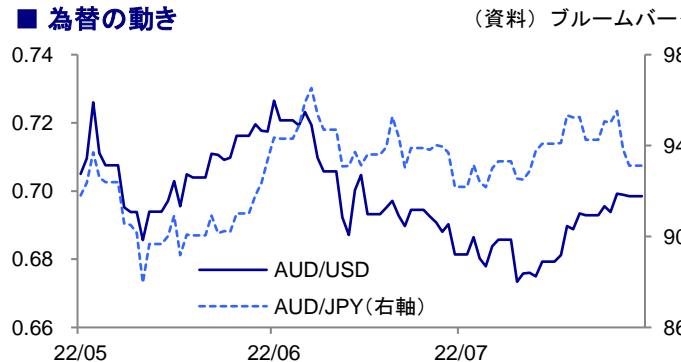
予想レンジ: AUD/USD 0.6680 ~ 0.7200
AUD/JPY 91.40 ~ 96.20

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

7月の豪ドルは前半、米国の積極的利上げ期待とリセッション懸念から継続的ドル買いにより、豪ドルは年初来安値を更新し続け、14日に年初来安値0.6682をつけた後、月後半は月末FOMCでの米国利上げ織り込みが1.0%から0.75%に剥落する過程で0.66台から0.70台へと上昇した。初旬5日のRBAを前にRBAの利上げ幅+50bpを織り込む動きや米国による一部対中関税を近く撤廃する可能性があるとの報道で0.69手前まで上昇した。RBA声明文では6月声明文に記載されていた「家計消費の強い伸びを見込んで…」との文言が削除され、「家計は価格高騰や金利上昇からの圧力を受けている」との認識が追加された。リセッション懸念を背景とした逃避需要からドル買いが進行し0.6762まで下落。8日は米6月雇用統計の良好な結果を受けてドル買いとなり豪ドルは頭を押さえられた。リセッション懸念は僅かに後退したが、FRBが高インフレ抑制の為に利上げを継続する道が開かれたとの認識が広がった。この他、中国の再ロックダウン懸念が燐る中、米株先物と原油の下落も豪ドルの売り材料となり、一時0.6716まで下落。13日は米CPIが+9.1%(前年比)の高水準になり、FRBの利上げ観測でドル買いが強まる0.6726まで下落。14日は強い豪6月雇用統計結果で0.6785近辺まで上昇するも、米6月PPI最終需要が高い伸びとなったことでドル買いとなり、安値を0.6682まで更新した。その後ウォーラーFRB理事による0.75%の利上げ支持で安堵感が広がり、株式が下げ幅を縮めると0.67台半ばまで戻した。15日は米7月ミシガン大学消費者信頼感で期待インフレ率が低下したことを受けて米金利低下とともにドル売りが進んだ。月後半は複数のFRB高官が超大幅な利上げに消極的な姿勢を示し、0.75%の利上げを支持する考えを示した事で、次回FOMCでの1%利上げの市場織り込みが徐々に剥落した。米7月ミシガン大学消費者信頼感を受け、次回FOMCでの+100bp利上げ期待が後退し、ドル売り優勢の流れが継続したことでも豪ドルを支え、0.68台半ばまで上昇した。19日、RBA議事要旨がタカ派的な内容だったこと受けて買いで反応。27日豪2QCPI総合が予想を下回り、豪ドルは売りとなるが、FOMCでFRBの利上げ慎重姿勢が垣間見られると、ドル売りとなり豪ドルは0.70台へ乗せた。月末にかけては米国の利上げペース加速の思惑が後退し、米債利回りが低下すると、米ドルに売りが膨らみ、豪ドルは0.70を跨いで上下した。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/5	RBAキャッシュレート
7/7	貿易収支
7/12	家計消費(前月比)
7/12	家計消費(前年比)
7/12	NAB企業景況感
7/14	雇用者数変化
7/14	失業率
7/14	参加率
7/27	CPI(前期比)
7/27	CPI(前年比)

(資料) ブルームバーグ

期間	予想	結果	前回
7月	1.35%	1.35%	0.85%
5月	A\$10825m	A\$15965m	A\$13248m
6月	-	0.9%	3.0%
6月	-	11.9%	8.1%
6月	-	13	15
6月	30.0k	88.4k	60.6k
6月	3.8%	3.5%	3.9%
6月	66.7%	66.8%	66.7%
2Q	1.9%	1.8%	2.1%
2Q	6.3%	6.1%	5.1%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.2700 ~ 1.3200
 CAD/JPY 100.00 ~ 110.00

米州資金部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

7月のUSD/CADは1.2893でオープン。

月初は金利上昇による景気後退懸念を背景に、原油や銅等のコモディティ価格が大幅に下落し、WTI先物価格は1バレル当たり100ドル割れ。為替市場ではUSDが買われ、USD/CADは7/15に6/17につけた1.3079を上回る1.3084まで上昇。

7/8に発表されたカナダの6月ネット雇用変化は予想に反して今年1月以来の減少となつたが、失業率は前月の5.1%から4.9%へと最低記録を更新。加えて、正規従業員の平均時給が前月+4.5%(前年比)から6月は+5.6%に急伸したこと、市場でのカナダ中銀7月会合での0.75%利上げ確率が上昇。しかし、同日に発表された米6月雇用統計も強い内容であったことから、FRBも積極的な利上げを継続するとの見方で、USD/CADは1.29台前半から1.30台半ばで推移。

7/13にはカナダ中銀会合が開催され、1998年以来の予想を上回る1%のサプライズ利上げとなり、翌日物政策金利は1.50%から2.50%へと引き上げられ、2008年10月以降で最も高いレベルなつた。カナダ中銀はインフレが予想をはるかに上回って進んでおり、インフレ期待も上昇していることから、前倒しで利上げを行う姿勢を再び強調。さらに、Macklem総裁は記者会見で、今回の利上げの最終地点は、「中立金利(2~3%)よりもやや高くなる("slightly above neutral")」との見通しを示した。

カナダ中銀が1%の利上げを決定したこと、市場ではFRBも7月FOMCで1%の利上げに踏み切るのではとの観測が浮上。USDは主要通貨に対して全面高となり、USD/CADも2020年11月以来の1.31台に入り、一時1.3224までUSD高が進行した。

しかしその後は、FRB要人から1%利上げを支持する声がせず、発表される米経済指標の軟調さが目立つようになり、月後半にはUSD売り優勢の流れとなり、1.30を下回っての取引が継続。

7/27のFOMCではFRBは予想通りの0.75%の利上げを決定。発表後行われた記者会見ではパウエル議長が、「FFレートを年末までに3~3.5%へ引き上げるだろう」と発言。すでに3.5%までの利上げは織り込み済みであることから、米金利が反転急落する動きにつれUSD売り・CAD買いの流れとなり、月末にかけては1.28台前半までCADが買い戻される展開となつた。

■ 今月の見通し

8月はカナダ中銀会合はなく、次回は9/7に開催予定。7/28現在、市場は次回9月会合での0.50~0.75%の利上げを予想しているが、最近カナダでも住宅ローン金利の上昇を背景とした住宅関連指標が軟調になっており、0.75%利上げ確率が低下している。

今月の市場の関心事が、リセッションに至るか否かということにあるため、グローバル経済の動向には引き続き注意が必要。

カナダ経済に関しては、雇用統計、インフレ率といった経済指標はもちろんのこと、カナダは住宅ローンを主因として家計に対する負債比率が米国等よりも高いことから、住宅関連指標は特に注視したい。

今後リセッション懸念が強まっていくようだと、原油価格も下落することになり、CADに対する強い買い意欲は期待できないと思われる。

7月FOMC後のUSD売りの流れで、一時的に1.26~1.27台へとCAD高に振れる可能性はあるが、長く続くことは想定しづらく、8月も1.27~1.32でのレンジ取引を予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

残念ながら、カナダの建造物となると、当地に誇れるものはないので、あえて東京・赤坂にある在日カナダ大使館を紹介させていただきます。

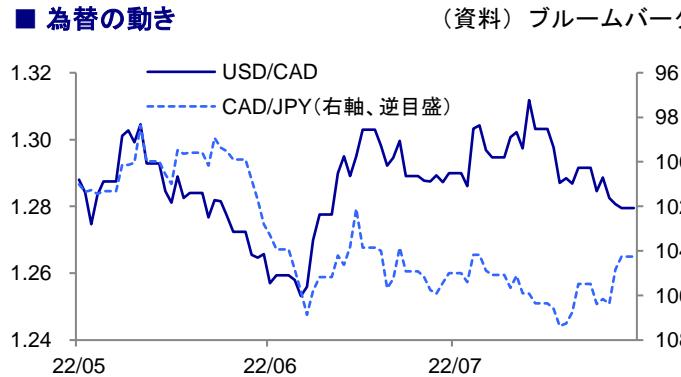
外観はモダンな作りですが、なかは広々として、モダンな中にもカナダの広大な自然を感じさせる素晴らしいスペースです。

港区もおすすめの場所としてウェップサイトで紹介しており、予約制ですが、一般の方も入ることができます。長いエスカレーターで4階へ上がる回廊式のカナダ・ガーデンがあり、カナダの大西洋岸から日本に至るまでの風景が彫刻、滝、庭園などによって表現されているそう。

またフレンチと和食を融合した”フランコ・ジャポネ”スタイルのレストランもあり、お食事が堪能できます。

お帰りの際には、忘れずに、Rest Room(トイレですね)にお立ち寄りください。私が知る限り、最もスタイリッシュでありながら、居心地最高で、ひと眠りしたくなるほどです。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/7	貿易収支	5月	2.40b	5.32b	2.17b
7/8	雇用ネット変化	6月	22.5k	-43.2k	39.8k
7/8	失業率	6月	5.10%	4.90%	5.10%
7/13	カナダ中銀金融政策決定会合		2.25%	2.50%	1.50%
7/14	製造業出荷	5月	-2.4%	-2.0%	2.60%
7/18	住宅着工件数	6月	274.0k	273.8k	282.2k
7/20	CPI前月比	6月	0.9%	0.70%	1.4%
7/20	CPI前年比	6月	8.4%	8.1%	7.7%
7/29	GDP前月比	5月	-0.2%	0.0%	0.3%
7/29	GDP前年比	5月	5.4%	5.6%	5.0%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1280 ~ 1330
 KRW/JPY 10.204 ~ 10.638 (注)100韓国ウォンあたりの対円レート
 JPY/KRW 9.400 ~ 9.800

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

7月のドル/ウォン相場は底堅く推移。1日は1,290.0ウォンでオープンすると、そこが月安値となり、直後から韓国6月貿易収支が巨額の赤字を記録したこと等あり底堅く推移。翌週4日のドル/ウォンは1,299.5ウォンにてオープンし5日にかけてドル/ウォンは1,300を挟んで方向感に乏しい展開。しかし5日海外時間のNDF市場にて投機的なウォン売りが入り、NDFレートながらドル/ウォンは1,315レベルまで上昇した。8日海外時間に発表された米雇用統計は良好な結果だったことから、11日の週のドル/ウォンは1,297.0ウォンにてオープン。しかし中国でのコロナ感染再拡大による地区封鎖への懸念等あり、市場全体でリスクオフムードとなるなかドル/ウォンは上昇。13日のBOK会合では50bpの利上げ(1.75%→2.25%)を決定するとともに、BOK総裁の会見ではインフレのピークを2022年3Q後半~4Q前半、年末の政策金利を2.75-3.00%程度と予想するものだった。概ね市場通りの内容ではあったものの、当局による介入と思われる動きも入り、ドル/ウォンは若干反落した。しかし、海外時間に発表された6月米CPIが予想以上に厳しいものとなると、市場の一部は7月FOMCにて1.00%の利上げを予想。かかる状況下、ドル/ウォンは上昇を防ぐ手立てなく15日に月高値1,326.7まで上昇した。18日の週に入ると、週前半は目新しい材料にかける中、国内での外国人投資家の韓国株買いや、中国株の上昇による人民元高などありドル/ウォンは下落。さらにイエレン米財務長官が韓国を訪問中であり、通貨スワップ契約締結議論が前進することへの期待もドル/ウォンの上値を抑える要因となり、20日朝方にドル/ウォンは1,302.8まで下落した。週後半においてはECBによる予想外の50bpの利上げ等あり、市場はリセッションを意識し、株安債券高の展開に。ドル/ウォンにおいてはドル売りと外国人投資家による韓国株売りの影響に挟まれ、方向感に乏しい展開となった。27日はFOMCにて75bpの利上げが決定されるも、パウエルFRB議長が今後の利上げ速度はインフレ指標次第との見方を示し、年末のFF金利見通しを3.0%前半と示唆したことから、市場全体でドル売りとなった。ドル/ウォンは月末の実需のウォン買いもあり下落し、結局前月末比0.7ウォン高の1,299.1ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

8月のドル/ウォンはほぼ横ばいとなる展開を予想する。

8月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の3点。

- ①インフレ推移と米FEDによる金融政策、②BOKによる金融政策、
 ③ロシアとウクライナを巡る地政学リスク等に起因する資源高・サプライチェーンの混乱

①FOMC(7月27日)では米政策金利の75bp引き上げが決定。

FOMC後の会見にてパウエルFRB議長はインフレを抑えるために利上げの継続を明言しつつも、年末のFF金利見通しを3%前半とし、9月75bp利上げ回避の可能性を残した。ここもとの利上げを受けて景気鈍化と期待インフレ率の低下が見られつつあり、パウエルFRB議長による発言と相まって金利低下地合いとなりつつある。8月10日発表のCPI次第ではありますとも、市場としてはドル買いの一服を期待している状況だろう。

②BOKは7月13日に初の50bpの利上げを実施(1.75%→2.25%)。8月にも50bpの利上げの可能性を残しており、最優先事項としてインフレを抑える旨を明言。当局も過度なドル/ウォンの上昇に警戒感を示しており、ドル/ウォンの上昇速度を落とす要因となろう。

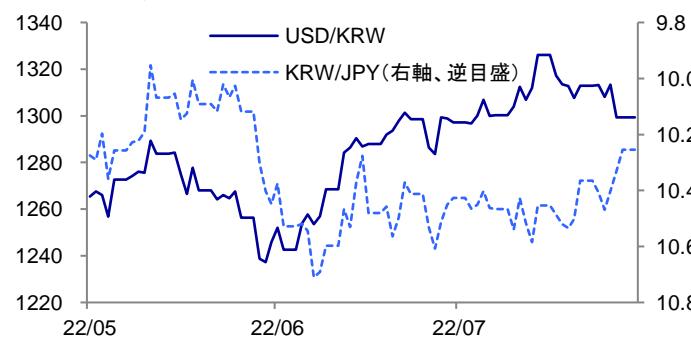
③ロシアが天然ガスパイプラインを一部停止させる等、インフレの要因である資源高は今も継続している。さらに中国ロックダウン等によるサプライチェーンの混乱は韓国の経常収支を悪化させており、実需面でのウォン買い圧力が弱りつつある。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

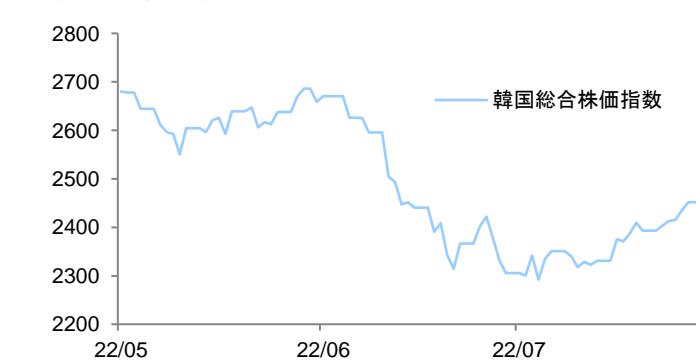
『当地が誇る有名な建造物』

当地が誇る有名な建造物ですが、韓国銀行日本店はソウルでは有名且つ、歴史ある建物です。韓国銀行は1909年に朝鮮半島内の中央銀行として設立し、日銀同様銀行券の発行を行う業務を担っておりました。建物は日銀本店本館や東京駅を設計した辰野金吾が設計しており、明治時代の面影がある建物となっております。ソウルでは、ソウル市庁(こちらも戦前の建物)と並び、歴史的建造物として認識されており、多くの観光客が来ております。ロッテタワーなど新しい建物が脚光を浴びやすいソウルではありますが、石造りの建物も残っています。ソウルに遊びに来たらぜひお立ち寄りください。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	輸出(前年比)	6月	3.8%	5.4%	21.4%
7/1	輸入(前年比)	6月	22.0%	19.4%	31.9%
7/1	貿易収支	6月	-4315M	-2470M	-1614M
7/5	CPI(前年比)	6月	5.9%	6.0%	5.4%
7/13	BOK政策金利発表		2.25%	2.25%	1.75%
7/13	失業率	6月	2.8%	2.9%	2.8%
7/26	GDP速報値	2Q	0.4%	0.7%	0.6%
7/28	景況判断(製造業)	8月	-	78	83
7/28	景況判断(非製造業)	8月	-	80	81
7/29	鉱工業生産(前年比)	6月	2.1%	1.4%	7.4%

台湾ドル相場

予想レンジ:

USD/TWD 29.75 ~ 29.99
TWD/JPY 4.45 ~ 4.66

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドルは上昇し、約2年ぶりの台湾ドル安水準に

月初7/1は29.790でオープン。外国人投資家の海外への送金需要から台湾ドル売りが優勢となり、7/6には29.83付近まで上昇。しかし、14,000ポイントを下回った台湾加権指数が反発すると台湾ドルが買われ、7/8には一時29.75付近まで戻した。

月央に入ると、7/12には世界的な景気後退懸念から台湾株も売られ台湾加権指数が再度14,000ポイントを割り込み、ドル/台湾ドルは29.9台にのせた。しかし、7/13には国家金融安定基金が株式市場への介入を決定との報道を受け台湾株が反発し、台湾ドル買いが優勢となると29.85付近まで戻した。ただし、米6月CPIが9.1%と市場予想を上回り、翌7/14にはドルが全面高となると再び台湾ドル安の流れとなり、7/15には29.96付近まで上昇。その後、米7月ミシガン大消費者信頼感を受けてドル高の流れが止正されると一時29.92付近まで戻したが、7/19には29.982まで上昇した。

月後半に入ると7/20は台湾株が反発したことから台湾ドル買いが優勢となり、29.85付近まで下落したが、輸入企業のドル買いから底堅く29.9台に戻した。その後は、台湾株は小幅な値動きながらも外国人投資家が台湾企業の配当金を海外へ送金するためドル買い圧力が強まったものの、月末の輸出企業のドル売りも入り、方向感出ず、29.9台前半のレンジでの推移が続いた。

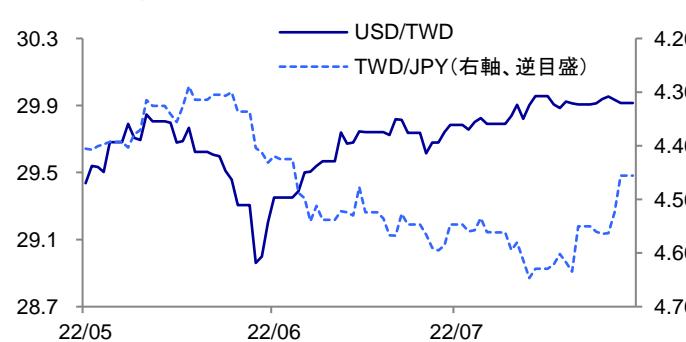
■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドルは上値が重い展開を見込む。

7月については、米長期金利の上昇も落ち着き、台湾ドル安の流れがやや落ち着いた。一方、リセッションへの警戒感から台湾加権指数は下落し、一時14,000ポイントを割り込み約1年7か月の水準をつけたが、3月、4月ほどの急激な台湾ドル安とはならなかった。

8月については上値が重い展開を見込む。景気減速による輸出の減少は警戒するところであるが、現在は輸出額・輸出受注額いずれも伸びは続いている。輸出受注額は4月分が前年同月比マイナスとなったが、中国のロックダウンの影響による一時的なマイナスで、5、6月はプラスに戻している。輸出額については増加しているものの、国別みると中国でのロックダウンの影響を受けて前年同月比ほぼ横ばいの水準が続いている。新たな変異株の拡大が警戒されているが、中国でのロックダウンの影響が落ち着けば、輸出の増加に寄与するであろう。また、リセッションへの警戒感から高騰していたコモディティ価格も落ち着きを取り戻しつつあり、過去最高水準にある輸入額も減少するであろう。貿易黒字が拡大も見込まれれば、世界的なリセッションへの警戒感が高まるも、節目の30を目前に上値はかなり重い値動きとなるであろう。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

日本人にとっては、台湾のイメージだと「千と千尋」のモデルにもなった九份を思い浮かべる方もいますが、近代的な建物もあります。2004年竣工時、世界一高いオフィスビルであった「台北101」です。

今ではその首位の座を明け渡し、台北101より高い建築物が世界中に増えましたが、その外観と高さで台北のシンボルになっています。まず、名前の通り、101階あり、台北の中でも断トツに高いです。外観については、伝統的な塔や竹をモチーフに逆さにした台形を8つ重ねた形で、高層建築物としては独特的なフォルムをしています。そんな不安定そうな外観に反し、地震や台風が多い当地でも振動や風圧に耐えられるよう、免振設備として上層階に球状のマスダンパーが備え付けられています(見学することも可能です)。

そして、驚きは年末のイベントの花火。台北101では年末のカウントダウン後に花火が開催されますが、想像していたより台北101で開催されます。建物から花火を打ち上げるのではなく、建物全体から花火が吹き出します。建物自体が燃えないか不安になるぐらい建物全体を花火が包み込むのです。今のところ火災になった話は聞いてないので大丈夫だと思いますが、日本では絶対にマネできない花火です。

なお、展望台は観光用なのでエレベーターは、いいお値段するので、高層階のレストランやカフェをうまく利用するとお得に過ごせるようです。ただし、眺めは席によって異なるので注意してください。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	外貨準備高	6月	-	548.96B	548.85B
7/6	CPI(前年比)	6月	3.60%	3.59%	3.40%
7/8	輸出(前年比)	6月	15.3%	15.2%	12.5%
7/8	輸入(前年比)	6月	25.5%	19.2%	26.7%
7/8	貿易収支	6月	2.80B	4.64B	2.41B
7/20	失業率	6月	3.78%	3.73%	3.73%
7/20	輸出受注(前年比)	6月	6.4%	9.5%	6.0%
7/25	鉱工業生産(前年比)	6月	2.00%	0.73%	4.14%
7/29	GDP速報値	2Q	3.15%	3.08%	3.14%

香港ドル相場

予想レンジ:

USD/HKD 7.8400 ~ 7.8500
HKD/JPY 16.50 ~ 17.80

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

7月の香港ドル直物相場は、米国連邦準備理事会(FRB)が物価安定を重視して金融引き締めに積極的な姿勢を見せる中、ペッグ制の下限である7.85まで再び下落した。月中に香港ドル金利の上昇が一服し、米ドル-香港ドル金利スプレッドが再び拡大したことで米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードが活発になり香港ドル直物相場の下落圧力となつた。実際、対米ドルでの香港ドルのT/Nフォワードポイントは1日あたり-3ポイント近くまで一段と低下した。また、中資系企業の配当フローといった季節需要や、ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による資金流入が一服したこと、香港ドル直物相場を押し下げる要因となつた。一方、香港経済の回復基調は続いている。新型コロナウイルスの感染例が増加しているにも関わらず、香港政府は行動制限の強化を控えている。6月の香港PMIは52.4と前月の54.9から低下したものの、節目の50は上回っているおり、失業率は5.1%から4.7%に大きく低下した。直近の小売売上高については大きく下落しているように見えるが、電子消費券配布による効果の剥落が影響しているとも考えられる為、次回データも見ながら基調を判断していく必要がある。

【7月の香港ドル金利市場】

FRBによる金融正常化を背景に香港ドルHIBORも上昇し、2年ぶりの高値を一段と更新した。7月初旬は季節的な資金需要の減退により、香港ドルHIBORの1か月物は一時的に低下していたが、6月の米国消費者物価指数(CPI)が前年比9.1%と高騰し、FRBの利上げ観測が一段と強まると、香港ドル短期金利にも上昇圧力が働き、1%台に乗せた。香港ドルHIBORの3か月物は、HKMAによる断続的な香港ドル買い/米ドル売り為替介入が実施され、アグリゲートバランスが2,000億香港ドルを割り込んだことが影響し、2%台まで上昇した。香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差(香港ドルHIBOR-米ドルLIBOR)を見てみると、それぞれ1か月物がマイナス90bpsからマイナス120bps、3か月物がマイナス50bpsからマイナス80bpsへと、それぞれマイナス幅を拡大させた。一方で中長期の金利については、米国の景気後退リスクが高まり、来年以降のFRBによる利下げ観測に焦点が当たり始めたことから、香港ドルスワップ金利のカーブは3%台前半を中心にもみ合う展開が続いている。

■ 今月の見通し

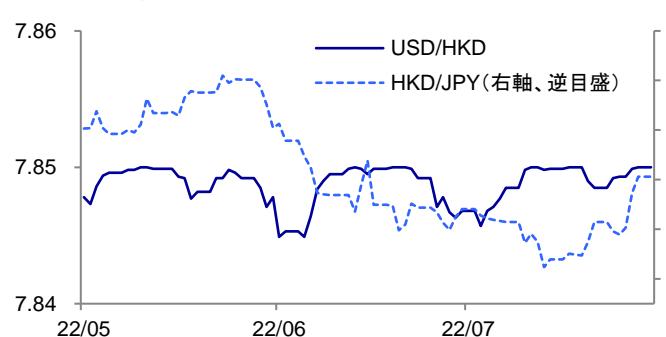
【8月の香港ドル直物相場】

FRBが積極的な利上げを継続し、中資系企業による実需の香港ドル買いフローも薄れる中では、香港ドル直物相場はペッグ制の下限である7.85近辺に留まる可能性が高い。香港ドルの市中流動性は減少しているものの、未だ高水準であること考慮すると、香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差(香港ドルHIBOR-米ドルLIBOR)は一段の拡大が見込まれる。T/Nのフォワードポイントが現在の水準に留まれば、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードの流れも継続的に香港ドル直物相場の押し下げ圧力となりそうだ。さらに、中国本土における新型コロナウイルスの感染拡大と不動産セクターを巡る不透明感により、ストックコネクトを通じた香港株式市場への資金流入が減速していることも、弱気材料として挙げられる。IPOは引き続き低調であり、IPOに関連する資金流入が香港ドル直物相場を下支えする可能性は低い。

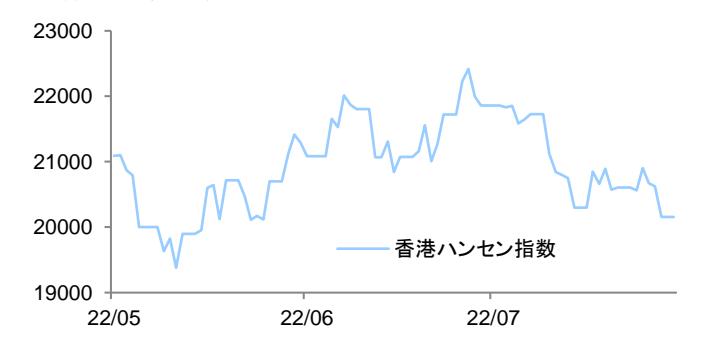
【8月の香港ドル金利市場】

米ドルとのペッグ制を維持する為、HKMAが断続的に香港ドル買い/米ドル売りの為替介入を行っていることを受け、HKMAのアグリゲートバランスは予想以上に早く1,000億香港ドルの節目に向かって減少していく可能性がある。この節目に達する前から、香港の銀行は近い将来の香港ドルの市中流動性減少に備えるべく、現金残高をより多く確保しているようだ。我々は、香港の銀行が9月下旬のFOMCを終えた頃にプライムレートを引き上げるとの見方を維持している。香港ドルHIBOR1か月物とプライムレートのスプレッドが縮小している為、銀行としては金利差を確保すべく、プライムレート引上げのインセンティブが働く。香港の銀行は、香港ドルHIBOR1か月物が2%以上に上昇した時点でプライムレートを引き上げる可能性が高い。香港ドルのスワップ金利は、高止まりするインフレ圧力と景気後退リスクの板挟みになる中、今後数年間のFRBによる金利サイクルが不透明な為、上下に振れる展開が予想される。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港の有名な建造物』

香港を象徴する有名なビルの1つが、中国銀行タワーです。このビルは1992年まで香港で最も高い建物(高さ1,034フィート)でした。パリのルーブル美術館のピラミッドを設計したことで有名な建築家、I.M.ペイの設計で、三角形の骨組みを一面ガラスで覆った非対称のデザインが特徴的です。その後、ICC(International Commerce Centre)、IFC(International Finance Centre)、Central Plaza等数々の有名な高層ビルが建設され、国際金融の中心地である香港の象徴的な風景を作るのに一役買っています。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	小売売上高(価格/前年比)	5月	8.4%	-1.7%	11.7%
7/5	S&P Global Hong Kong PMI	6月	-	52.4	54.9
7/7	外貨準備高	6月	-	\$447.3b	\$465.0b
7/19	失業率(季調済)	6月	5.0%	4.7%	5.1%
7/21	CPIコンポジット(前年比)	6月	1.6%	1.8%	1.2%
7/25	輸出(前年比)	6月	-0.7%	-6.4%	-1.4%
7/25	輸入(前年比)	6月	-2.1%	0.5%	1.3%
7/25	貿易収支(HKD)	6月	-\$38.6b	-\$68.5b	-\$36.7b

中国 人民元相場

予想レンジ:

USD/CNY	6.6000	~	6.9500
CNY/JPY	19.14	~	21.21
100JPY/CNY	4.7100	~	5.2300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

7月のドル人民元(USDCNY)は、6.69台から上昇し、一時6.77台へ。

1日は6.69台半ばでオープン。米国の対中関税引き下げが期待される中、5日の中米会談で実施の具体的な発表は見られず相場の動きは限定的となった。同日夜間、ユーロ安ドル高が進んだことでUSDCNYも6.72台前半まで上昇したが、翌6日には再び6.70台で推移し、週後半も同水準での値動きが続いた。

11日は6.69台後半でオープン。週央に公表を控える米6月CPIに対する警戒感や中国内のコロナ感染拡大懸念の再燃の思惑から、USDCNYは底堅い推移。米CPI公表後の14日には6.76台後半へ上昇。

18日は6.74台後半でオープン。次回FOMCでの100bp利上げ期待剥落により週初はドル売りの流れで6.73台前半へ下落。その後は国内コロナ感染懸念を背景に元安地合いとなり、21日には一時6.77台前半へ上昇。

25日は6.75台半ばでオープン。週前半はFOMCを控え方向感なく推移していたものの、27日夜間のFOMCで今後の利上げペース鈍化について触れられたことからドル売りが優勢となり、USDCNYは27日の6.76台から28日は6.74台へ下落しギャップオープンした。

■ 今月の見通し

8月のUSDCNYは底堅い展開を予想する。

4月下旬から5月半ばにかけては上海の防疫措置強化の動きを受けた中国景気先行き不透明感の増大や当局による金融緩和強化の動きへの思惑から記録的なスピードで大きく元安が進んだ。当局はいくつかの景気支援策を発表するに至ったが、現時点において企業の貸出金のベースとなるLPR1年物は3.70%の水準が維持され(直近の引き下げは2022年1月)、住宅ローン金利に適用されるLPR5年物が5月に15bps引き下げ(4.45%)するに留まっている。一方で、7月に発表された2QのGDPは前期比▲2.6%とマイナス成長となった他、IMFは中国の2022年成長率見通しを1.1ポイント引き下げ3.3%としている。これまでのところ為替市場に影響を与える目立った政策は見られないものの、ゼロコロナ政策維持による中国景気減速の長期化は引き続き元安要因となり、相場を下支えすると考える。

海外投資家による金融市場への証券投資フローについては、株式の資金流入は弱く、債券市場は2月以降月次ベースでの売り越しが継続している。数少ない元高材料として、貿易収支の堅調な推移が挙げられるものの、中国サイドにおけるUSDCNYの変動要因としては元安材料が優勢か。

資金市場では潤沢な流動性を背景に、7月に入ってShibor O/Nは一時1%を割れる水準まで金利低下。中米の金利差が拡大していることもドル高元安をサポートするとみられる。

但し、米国サイドの材料として、リセッションに関する議論が高まっており、USD主導でUSDCNYが下落するシナリオは想定されるため、米国経済指標やFRB高官の発言には引き続き留意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

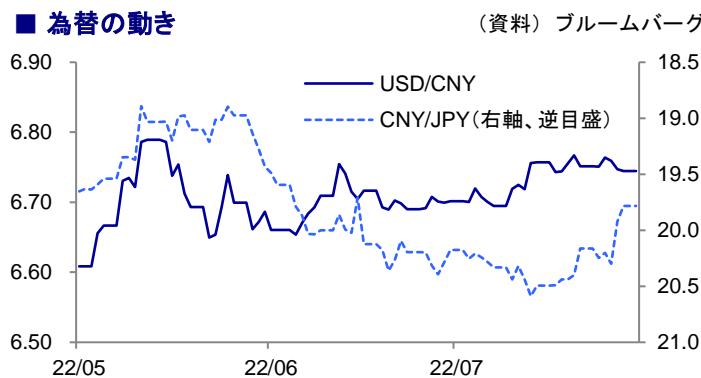
中国の建造物と言えばやっぱり「万里の長城」でしょう。人類史上最大の建造物と言われており、西端から東端までの総延長は6,352km。北海道から沖縄までの距離に該当します。約2200年前、秦の始皇帝により建設されていますが、現在残っている部分のほとんどは14世紀頃の明の時代に建設された部分だそうです。

私自身は、上海に来て1年程経ちますが、まだ上述の「万里の長城」へは行ったことがありません。そのかわり、漢の「万里の長城」を見たことがあります。

漢の時代に作られた「万里の長城」は敦煌という都市郊外にあります。最初にご紹介した「万里の長城」のようにしっかりとした塀が残っているわけではなく、草の生えていない砂漠一步手前のような広くて何もないところに、周りよりも少し高くなっている細い足場がずっと続いているのが漢の「万里の長城」です。長い年月の中で砂嵐などにさらされ、昔の状態はほぼ残っていないのですが、それでも昔の姿を想像することでスケールの大きさや歴史を感じることができます。

「万里の長城」はその大きさ故に色々な観光ポイントやおススメスポットがありますので、一度も見たことがない方だけでなく、一度訪れたことがある方でも、他の「万里の長城」に行ってみていただければと思います！

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	製造業PMI	6月	50.5	50.2	49.6
6/30	非製造業PMI	6月	50.5	54.7	47.8
7/9	PPI(前年比)	6月	6.0%	6.1%	6.4%
7/9	CPI(前年比)	6月	2.4%	2.5%	2.1%
7/13	貿易収支	6月	\$76.80b	\$97.94b	\$78.40b
7/15	GDP(前年比)	2Q	1.2%	0.4%	4.8%
7/15	工業生産(前年比)	6月	4.0%	3.9%	0.7%
7/15	小売売上高(前年比)	6月	0.3%	3.1%	-6.7%
7/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	6月	6.0%	6.1%	6.2%
7/20	1年物LPR	-	3.70%	3.70%	3.70%

シンガポールドル相場

予想レンジ:

USD/SGD 1.3700 ~ 1.4420
 SGD/JPY 92.50 ~ 102.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年07月のシンガポールドル(SGD)相場はSGD高が進行。

月初のSGDはUSDに対しじり安に推移。米株が軟調推移となったことや、発表された米経済指標が弱い結果であったことを受けて、USD/SGDは1.40台前半の水準まで上昇。また、5日、ノルウェーからのガス供給を巡る不安から欧州景気への先行き懸念も重なり、USDへの逃避需要が急速に高まった。USD/SGDは1.40台後半の水準へ上昇。その後のUSD/SGDは14日において狭いレンジ内で推移。米6月消費者物価指数の発表を控えアジア通貨はやや水準を戻すも、実際に発表されたCPIは予想比上振れとなり、市場は一時乱高下。USDは持ち直しに転じ、USD/SGDは1.41台まで上昇。

14日、シンガポール金融管理局(MAS)は10月の通常会合を待たずして緊急の通貨政策の見直しを行い、政策バンド(NER)の中央値引き上げを発表。SGD高方向への調整であり、政策バンドの傾斜、幅については共に据え置きとした。これはサプライズであり、SGDは一時急騰。1.40台後半で推移していたUSD/SGDは、1.39台半ばの水準までSGD高が進行した。しかし15日、発表された中国の4~6月期GDPが市場予想を下回ったことを受けてアジア通貨が軟調となるなか、SGDも連れ安に。USD/SGDは再び1.40台半ばの水準まで上昇。

その後、市場の注目はECB及びFOMCへ。ECBの大幅利上げ観測が高まる中、アジア株は堅調に推移。USD/SGDはじりじりと値を下げ、1.39台前半の水準へ。実際のECBでは50bpの利上げが発表され、USD安EUR高の動きに連れSGDは上昇。22日、欧州圏、米国のPMI下振れを受けて米金利が低下し、USD安トレンドが継続する中、USD/SGDは1.38台まで下落する展開。

27、28日に開催されたFOMCでの利上げ幅は75bpと市場予想通り。パウエルFRB議長は今後の利上げペースはデータ次第と減速の可能性を示唆。28日、米国時間に発表された米4~6月期実質GDPの下振れに米金利低下、USD安が続き、SGDは上昇。現在、USD/SGDは1.37台後半の水準で推移している(29日現在)。

■ 為替の動き



■ 今月の見通し

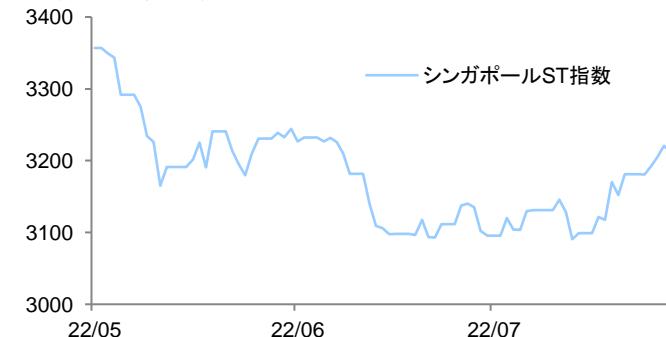
2022年08月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安の進行を予想。

シンガポール金融管理局(MAS)は7月14日、10月の通常会合を待たずして通貨政策の見直しを行い、政策バンドの中央値引き上げを発表した。SGD高方向への調整であり、政策バンドの傾斜、幅については共に据え置きとした。

MASは通常、4月・10月の年2回、通貨政策の見直しを行っているが、昨年10月の会合以来、本年1月の臨時会合、4月の会合と、断続的に金融政策の変更を発表しており、4回連続となる金融引き締めを発表。通貨策変更に加え、本日の声明文にて、「インフレ率の上昇と着実な景気回復を踏まえ、今後も適切に金融引き締めを行っていくことが必要」とのスタンスを示した。また、発表された第2四半期GDP速報値は前年同期比+4.8%。第1四半期(+4.0%)より加速した内容となり、「国内外の移動規制が大幅に緩和されたことが要因」とコメント。他方、全世界的な景気後退による将来的な負の影響を否定せず、2022年の年間GDP成長率見通しを3~5%と予想する一方、2023年の成長見通しについては、「さらに緩やかなものになる」との見通しを示した。インフレについては、全世界的なインフレ圧力が今後数か月間は高止まりするとの見通しも同時に示し、MASはコア・インフレ見通しを3.0~4.0%で推移するものと予想。前回予想(2.5~3.5%)を上方修正した。インフレと経済成長の不確実性が高まる環境下、国内外の経済情勢を引き続き注視していくと述べている。

こうしたMASによるタカ派傾斜な政策変更をもってしても、USD高トレンドは継続しており、こうした動きは足元暫くの間継続するものと予想する。USDは現状、断続的な利上げを背景としたUSD買い需要に加え、景気後退懸念に伴うアジア通貨安(≒USD高)という双方からの要因により、USDは一段高くなっている。こうしたトレンドが変わるためにFRBの断続的な利上げが一服する必要があるが、高止まりする米インフレ指標の状況を勘案、当面はタカ派的なスタンスを維持するだろう。

■ 株価指数の動き



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

このお題への回答を検討する際、シンガポールにおいて「マリーナベイサンズ(MBS)」以外の建造物を紹介する御仁はいるのだろうか。「何種類か」というなら他の答えも見つかるだろうが、象徴的過ぎますし、一旦MBSのことを書くしかない。しかし今更、「屋上のプールが凄い！」とか「ビルが斜め！」とか書いても仕方がないので、他のネタを探す。

まず、MBSには近々、新しいタワーが建てられる。周りで工事が始まっている気がするので多分本当。新しいタワーと既存のタワーは繋がる予定はない(既存の各タワーは屋上で繋がっている)。そして、MBSに隣接する新しいタワーは当然ホテル用途だが、なんとスイートルームしか作る気がないそうだ。お金を使うつもりの人、ぜひ来てね！という感じだ。そしてきっと、既存のMBSもそうだが、綺麗な器をドカンと造り海外の方を誘致する投資は、成功を収める気がする。ポリシーが一貫していて清々しい。

他のMBSネタと言えば、数年前に公開された「見た目は子供、頭脳は大人」的な探偵アニメの映画において、MBSの屋上が吹っ飛びインフィニティプールがまるごと海に着水するというシーンが話題になった。某映画を当地で見た私は、「これは皆さま、不快に思うのでは、、、」と心配したもの、劇場内はむしろ拍手喝采及び爆笑の渦。日本の著名なアニメがシンガポールを題材にしてくれたことを嬉しい思って下さったようだ。日本でこれを見ていたら知ることなかった側面であり、とても感慨深く、貴重な経験だった。なお、実際のマリーナエリアは埋立地であり水深が全くないため、「実際にあのような事故が起きたら上手く着水出来ず、主人公たちは死んでいたかもね」と連れの友人が教えてくれたが、有難くスルーさせて頂いた。懐かしい想い出である。(アジア・オセアニア資金部 成田)

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	購買部景気指数	6月	50.4	50.3	50.4
7/5	小売売上高(前年比)	5月	13.4%	17.8%	12.1%
7/14	GDP	2QA	5.4%	4.8%	4.0%
7/18	非石油輸出(前年比)	6月	6.1%	9.0%	12.0%
7/25	CPI(前年比)	6月	6.2%	6.7%	5.6%
7/26	鉱工業生産	6月	5.4%	2.2%	10.4%

タイバーツ相場

予想レンジ:

USD/THB 36.20 ~ 37.30
THB/JPY 3.66 ~ 3.80

アジア・オセアニア資金部 バンコク室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

7月のドルバーツは2006年以来のバーツ安水準へと上昇。35バーツ前半で取引を開始し、各国中銀の金融引き締めによる経済のリセッション懸念が強く意識される中、ドルバーツは早々に35バーツ後半へ。その後も、ロシアからの天然ガス供給不安による独エネルギー大手企業の業績悪化問題や、エネルギー価格高が欧州の景気を悪化させる懸念からリスクアセット売りが加速。加えて、中国・上海市で新型コロナの大規模検査が再開される等感染力の強い株に置き換わりが進む中、同国での再ロックダウン懸念も意識されたため、36の大台を抜けて36.30前後まで上昇した。

中旬、13日の米CPI発表前に更にバーツ安が進んだが、米6月CPIが市場予想を上回ると、カナダ中銀が100bp利上げに踏み切ったことも影響して、7月FOMCでも100bpの利上げ予想が急速に高まる状況に。その後は大幅利上げ予想による米景気後退懸念を受けて米金利が低下したため、一時ドル安で反応。但し、タイ中銀が8月定期会合まで臨時会合を開催しないことへの失望感や、弱い2Q中国GDPを嫌気して36バーツ半ばから後半のレンジで底堅く推移。

下旬、21日はFRBが利上げを急ぐとの見方が継続することで新興国市場からの資金流出が進み、海外投資家がタイ株式やタイ債券を手放す動きが目立った。また、中国の再ロックダウンへの警戒とサプライチェーンに与える影響も不安視されて、21日には一時37バーツ近辺へバーツ安が進むも、同日海外時間では米景況感の悪化が確認されて、米金利が低下する環境に上値を抑えられる展開。22日以降はタイ中銀総裁のハト派発言でバーツ売りが一時強まったが、27日のFOMCを控えて36バーツ後半を中心に推移。タイ金融市场の7月最終営業日である27日もポジション調整と思しきフローがメインとなり、タイの4連休及び7月FOMCの結果発表を迎えることとなつた。

■ 今月の見通し

8月のドルバーツ相場は引き続き底堅い展開を予想する。本稿執筆時点において、8月のタイ中銀MPCでは25bps利上げが市場予想のメインシナリオだが、大半の周辺国が50bps単位以上での利上げに踏み切っている状況下、タイ中銀が利上げに踏み切ったとしても相場へのインパクトはほぼ無いと考えられ、寧ろMPC後の声明にて利上げに前向きな姿勢が見られない場合、7月同様に失望売りが入ることすら想定される。

また、足元では中国での新型コロナ新規感染者数増加によって、秋に共産党大会を控えた中国指導部がゼロコロナ政策の方針転換をすると見込めないため、コロナ禍以前の最大の外国人観光客供給元からの訪タイ観光客数回復が見込みにくくなることは、バーツ高に転じるタイミングが当初のタイ中銀想定よりも遅れざるを得ないことを意味すると考える。

米国に目を向けると、インフレ抑制対応を足許の至上命題とするFRBのスタンスがマイルドになるためには今しばらく時間(インフレ沈静化が確認できる経済指標の発表)が必要な状況にある。FRBの利上げ継続による米景気後退懸念が意識されやすい状況で、米10年債利回り等の長期金利のピークアウト感が高まるようであれば、年初来進んできたドル高の一部巻き戻しが入ってドルバーツの上値が重くなる場面もあると考える。しかし、そうした反応が生じる際にも、米株等のリスク性資産に売りが入り、新興国は資金流出圧力に晒されやすい環境に立たされると考えるため、ドルバーツの下値は限定的となるだろう。

以上より、ドルバーツは引き続き約16年ぶりバーツ安水準を中心とした動きになると予想するが、8月25日から開催予定のジャクソンホールにて9月FOMCの手がかりが出た場合には上下に振れ易い地合いとなる可能性には注意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

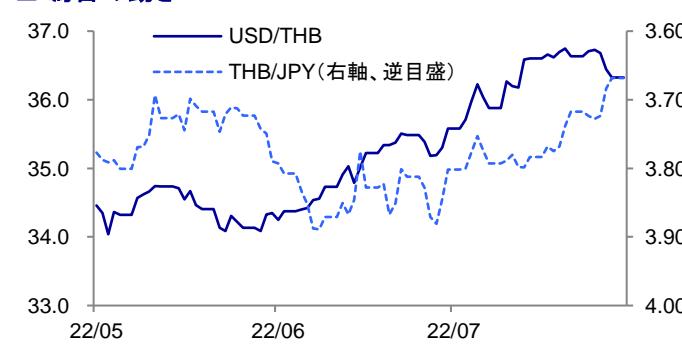
『当地が誇る有名な建造物』

仏教国であるタイには多数の寺院があり、当地が誇る有名な建造物としては、寺院が筆頭に挙がると思います。首都バンコクでは、三大寺院と呼ばれる寺院があり、ワットプラケオ、ワットアルン、ワットポーのことを指します。いずれもガイドブックに必ず載っているくらい有名です。どの寺院も素晴らしい、訪れる価値がある寺院ばかりですが、個人的にこの3大寺院に加えて、ワットパクナムをお勧めします。

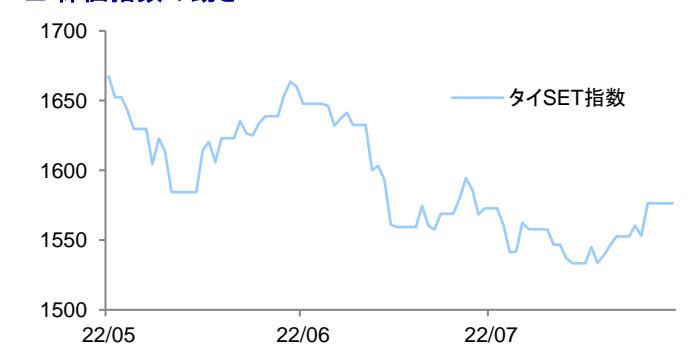
ワットパクナムの特徴としては、5層構造の仏塔があり、その最上階がいわゆる「映え」する有名撮影スポットです。星がちりばめられたエメラルドグリーンの天井画が非常に美しく、言葉ではその壮麗さを言い表せません。

また、寺院とは別の番外編として、弊行バンコク支店が入居するビルの近くにあるマハナコンという超高層ビルもお勧めです。こちらはタイで最も高い地上高314mの建物で最上階にルーフトップバーとスカイウォークと呼ばれる展望台があります。展望台には世界屈指の面積(約12x4m)のガラス床があり、ガラス床を歩いたり、床に寝そべったり出来ます。東京タワーの頂上近い高さの所がガラス床になっているイメージです。昼夜それぞれバンコクの違った風景が見れるため、私は夜しか訪れたことがありませんが、昼は一層遠くまで見渡せる360度絶景ビューが楽しめるようですので、昼夜両方という選択もあります。ただし、高所恐怖症の方は夜にチャレンジした方が良いというのが私の印象です。(恐らく日中はよりクリアな視界のため下を見れない、寧ろガラス床に乗れない可能性があります。)

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	CPI YoY	6月	7.45%	7.66%	7.10%
7/5	CPI コアYoY	6月	2.37%	2.51%	2.28%
7/7	消費者景気信頼感	6月	-	35.7	34.3
7/25	自動車販売台数	6月	-	67952.0	64,735
7/27	経常収支	6月	-\$2,500M	-\$1,873M	-\$3,716M
7/27	貿易収支	6月	-	\$2,059M	\$1,985M
7/27	輸出	6月	-	11.10%	11.30%
7/27	輸入	6月	-	24.30%	23.30%

マレーシアリンギ相場

予想レンジ:

USD/MYR	4.40	~	4.50
MYR/JPY	30.30	~	31.25
JPY/MYR	3.20	~	3.30

マレーシアみずほ銀行 内田 増

■ 先月の為替相場

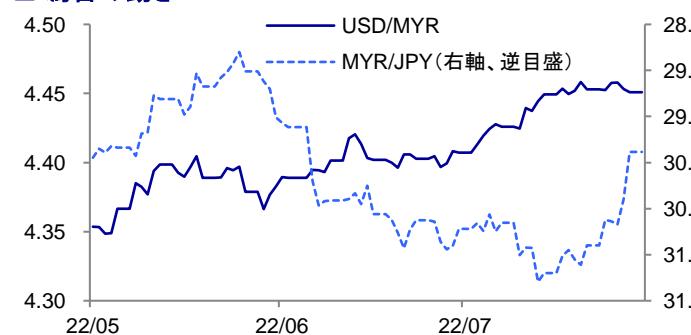
先月リンギット相場はやや一方向にリンギット安が進む相場展開となり、97年アジア通貨危機以来の歴史的な水準となる4.45台での推移となった。

上旬は6日にマレーシア中銀が5月に続く2会合連続の25bp利上げを決定。政策金利を2.25%とした。会合では現金利水準は歴史的低水準であり、金利正常化に向けた途上にあるとの認識を示した。また、国内経済は引き続き上向きとしており、主要国が利上げに走る中、次回以降の利上げを前向きに捉える形。今次利上げは市場予想範囲でもあったことから発表後の市場反応は限定的。一方、その後NY時間に発表されたFOMC議事要旨では経済成長への影響が伴ったとしてもインフレ抑制に向けた政策決定が必要との認識が確認されUSD/MYRは一時4.43までドル買いリンギット売りとなった。

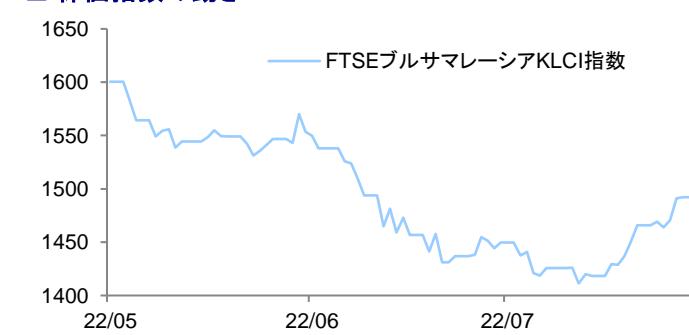
中旬にかけてもドル買いリンギット売りの流れは続いた。13日米6月CPIは市場予想を上回る+9.1%を記録。約40年ぶりの上昇を記録したことで28日FOMCを控えて100bp利上げが意識されドル高が進行。翌14日のリンギット市場では、リンギット安進展で20年3月のコロナ第一波感染拡大時に付けた4.449に迫る水準までUSD/MYRは上昇。その後もEUR/USDが約20年ぶりのパリティ割れでドル上昇が続き、リンギットは下落幅を拡大。一方、対円相場では、JPY独歩安でUSD/JPYが1998年以来の139円台を付けるとMYR/JPYは31円30銭台まで上昇。また、カナダ中銀100bp利上げの他、アジア域内でも韓国50bp、フィリピン75bp利上げを実施し、シンガポールでも異例の金融引き締め。いずれも市場コンセンサスを上回る利上げとなり、為替市場は各国中銀による利上げで揺れた。

下旬はFOMCを28日に控えて市場は様子見ムード。USD/MYRも4.45-4.46の狭いレンジ推移となった。注目のFOMCは市場予想通り75bpの利上げとなり、一部100bpを見込んでいた参加者のドル売り戻しが入り、USD/MYRは一時4.45半ばまで下落。ただドル売りの流れは続かず同水準で月末を迎えた。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 今月の見通し

今月のリンギット相場は国内で主なイベントがない中、9月に米国、マレーシア両国で控える金融政策会合を睨みながらの不安定な相場展開となりそうだ。

世界の主要国では、物価高進行に伴い金融引き締めスピードが加速化している中、アセアン各国の状況を確認してみると、インフレ水準にバラツキがあること等から、各国中央銀行による利上げ判断にもやや差が出て来ている状況である。斯かる状況下、マレーシアは政府によるエネルギーや食糧品に対する価格統制策により、比較的インフレは落ち着いた水準で推移している。マレーシア中銀は景気影響を注視しつつ、緩やかな利上げシナリオを描くことがで来ているというのが足元の解釈となる。

直近の物価動向を確認すると、先月22日に発表された6月CPIではヘッドラインが3.4%、変動の大きい食品、エネルギーを除くコアが3.0%といずれも5月から大幅に上昇。特にヘッドラインについては、中銀見通しのレンジ上限を上回る水準まで上昇しており、年内残り2回の政策会合では合計50bp程度の利上げが見込まれていたが、直近結果を踏まえ、更なる利上げ余地を探る相場展開になりつつある。

一方、為替水準がどうかと言えば、対ドルでは97年アジア通貨危機以来の最安値水準、対円では円安の影響を反映し、約6年ぶりのリンギット高に位置する。つまり、通貨毎の選別が進んでおり、対ドルでは相当な安値水準。また、主要国の通貨騰落率を確認すると、ルーブルを除くほぼ大半の通貨は対ドルで下落しており、その下落幅は年初来で0-20%レンジにある。その中でリンギットは約6%の下落に留まっており、アセアン通貨で絞れば凡そ中位程度の下落率。天然資源を豊富に持ち、主力のE&Eを中心に輸出を堅調に伸ばして外貨を安定的に稼ぐマレーシアの実力からすると、やや為替動向は力強さに掛けるというのが見方となる。

昨年春先より米国利上げシナリオでトレンド化したドル高相場は、年末にかけてピークアウトすると見ているが、ピークアウト後のリンギット買戻し相場がいつ訪れ、また、どの程度の強さを示すか、9月以降の相場トレンドを占う上で、イベントなき8月は意外と重要な一か月となるかもしれない。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地が誇る有名な建造物』

マレーシアで有名な建物と言えば、様々な話題に事欠かないペトロナスツインタワーを思い浮かべる方は多いのではないかと思います。KLにも多くの高層ビルが建設され、今でこそ452メートルという高さ自体には突出感は無くなってしまいましたが、2棟が仲良く並んで手を繋ぐように連結されている姿は遠くから見ても素敵ですし、平和を大切にするマレーシアを象徴する建物だと感じています。方向音痴で自分の場所がすぐに分からなくなる私にとっては、迷った時に自分の居場所を確認する大切な目印となっています。また、独立記念日の美しい国旗色を見ると、素直に感動させられます。自身で現地視察して傾きを計測したことはないのですが、例え少々傾いていてもマレーシアを代表するランドマークであることは間違いないと思っています。また、そのタワーの一つが日本の建設技術で建てられたと言うのは何とも言えない喜びがあるものです。

もう一つ有名な建造物を挙げるとすると、寺院ではないかと思います。マレーシアと言えばイスラム教モスクとして、ガイドブックでも有名なブルーモスクやピンクモスクイメージされる方がいらっしゃると思いますが、例えば、鍾乳洞で有名なバトゥ洞窟は、19世紀に建てられたヒンドゥー教寺院ですし、天后宮も東南アジアでも屈指の大きさを誇る中国寺院であり、縁結びスポットとしてマレーシアにも人気の地になっています。こうして様々な文化的建造物が一度に楽しめるのもマレーシアの魅力の一つではないかと考えています。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/7	Foreign Reserves	Jun30	-	\$109.0B	\$109.2B
7/8	Industrial Production YoY	May	6.2%	4.1%	4.6%
7/20	Exports YoY	Jun	21.2%	38.8%	30.5%
7/20	Imports YoY	Jun	32.0%	49.3%	37.3%
7/20	Trade Balance MYR	Jun	17.05B	21.93B	12.62B
7/22	CPI YoY	Jun	3.20%	3.40%	2.80%
7/22	Foreign Reserves	Jul 15	-	\$107.0B	\$109.0B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14700 ~ 15200
 IDR/JPY 0.89 ~ 0.93
 JPY/IDR 107.53 ~ 112.36

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資本部 田才 雄

■先月の為替相場

7月のドルルピアは、ルピアがおよそ2年ぶりの安値圏で推移するも、月末にかけて反発した。

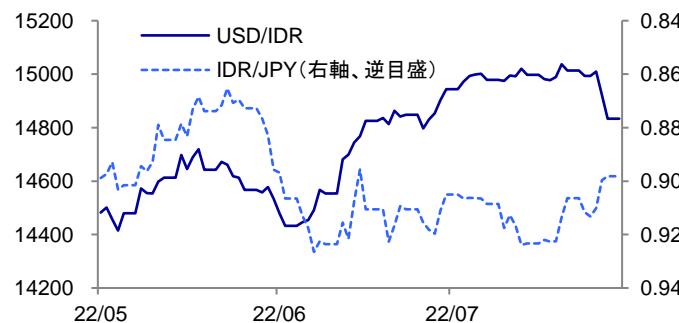
月初1日、前月末の流れを引継ぎルピア安が継続、14900台半ばでスタートしたドルルピアは14900台後半までルピアが下落した。この日発表されたインドネシアの消費者物価指数は4.35%まで上昇したことが明らかになった。ついで、中銀目標である2-4%のレンジ上限を上回るも、一方で、コアインフレ率は2.63%となり、インドネシア中銀ペリー総裁は利上げを急いでいないとルピア安が進む中で述べた。4日、ジャカルタ総合指数が急落するなど、リスク回避姿勢が鮮明となる中、米ドルが選好され、ルピア安地合いが継続。翌5日、およそ2年ぶりに15000に到達した。翌6日も世界的な景気後退懸念が燐る中、グローバルにリスク回避姿勢が続き、ドルルピアは15000台半ばまでルピアは直近安値を更新した。しかし、その後は達成感もあり、ルピア安は一服。7日以降は14900台後半での推移に。その後は13日に米6月CPIの発表を控え、様子見ムードが広がるなか、動意の乏しい展開が続いた。米6月CPIの強い結果を受け、アジア通貨は対ドルでの下落が目立つも、ドルルピアは14900台後半で底堅く推移。15日に発表された、インドネシアの6月貿易収支は、パーム油の輸出急増に伴い、50億ドル超の黒字に。アジア通貨の中でもルピアが底堅く推移している材料は健在であることが確認された。

月後半になり、インドネシア中銀定例会合の結果発表を控える中、様子見ムードが続いた。ドルルピアは14900台後半で方向感が出ず。

21日、注目の中銀政策決定会合の結果は、政策金利である7日物リバースレポ金利を過去最低の3.50%に据え置き、市場予想通りの結果に。しかし、一部には利上げを期待する向きがあつたことや、アジアにおいて引き続き緩和的な姿勢を崩していない数少ない中銀であることから、ルピアは再び直近最安値圏となる15000台半ばまで下落した。翌22日は新規材料に欠ける中、15000台前半で前日と変わらない水準での推移が続いた。月末にかけて15000を挟んだ動きが続いたが、米FOMC結果とパウエル議長が期待ほどタカ派とならずドル安となる中、ルピアも14900台前半まで強含んでいる。

(28日終値時点)

■為替の動き



(資料) ブルームバーグ

■株価指数の動き



(資料) ブルームバーグ

■先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI(前年同月比)	6月	4.19%	4.35%	3.55%
7/15	貿易収支(USD M)	6月	3482	5090	2900
7/15	輸出(前年比)	6月	30.26%	40.68%	27.00%
7/15	輸入(前年比)	6月	20.10%	21.98%	30.74%
7/21	BI 7daysリバースレポ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

(資料) ブルームバーグ

フィリピンペソ相場

予想レンジ: **USD/PHP 54.50 ~ 57.00**
JPY/PHP 0.39 ~ 0.43

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榊 雄一郎

■先月の為替相場

米経済指標が低調な結果となるなど、世界的な景気減速懸念の高まりから、センチメントが悪化したことを受け主要アジア通貨は軟調地合い継続となるなか、6月のフィリピンの消費者物価指数が前年比+6.1%と予想対比強めとなり、インフレ加速懸念のほか経済活動拡大による輸入増加によって経常赤字が拡大していることや、財務大臣が今年のGDP見通しについて当初想定よりも減速する可能性があるとの見通しを示したことが嫌気され、ペソは6月からの下落ペースを加速させ、7日には2005年9月以来となる1米ドル=56.000ペソを割り込んだ。その後、メダラ中銀総裁が8月会合での大幅利上げの可能性に言及したことから、ペソ安一服となり節目の水準付近での揉み合い推移が続いたが、12日には5月の貿易赤字が市場予想を上回り、過去最大の赤字となったことから、ペソは急落し、過去最安値水準となる1米ドル=56.450ペソを付ける局面が見られるなど、アジア通貨の中でも下落を主導した。

6月の米消費者物価指数の強い結果を受けて、米利上げ織り込みが加速し、主要アジア通貨が軟調地合いとなるなか、14日にフィリピン中銀は臨時会合を開き、75BPの緊急利上げを決定したことから、ペソは大幅反発となつた。しかしながら、財政赤字や経常赤字に対する懸念や米引き締め強化が重しとなり、利上げ発表後のペソ上昇分を一部解消するなど、ペソ高は限定的となつた。8月会合での追加利上げ等、中銀のスタンスがタカ派となる一方で、5月の海外在留労働者からの送金額が前年同月比1.8%増と市場予想の4.3%増を下回ったほか、6月の国際収支が15.7億ドルの赤字と前月に赤字幅が大きく拡大した水準から、僅かな赤字幅減少に留まったことが嫌気されペソは過去最安値付近の水準で方向感に欠ける展開が続いた。

景気減速懸念を受けた米金利低下からドルが弱含む展開となったほか、施政方針演説にてマルコス大統領が経済成長を後押しするための政策を打ち出したほか、メダラ中銀総裁が7月の75BPの緊急利上げに続いて、8月会合での25BP乃至は50BPの追加利上げの可能性に言及したことから26日にペソは急伸し、1米ドル=55ペソ台を回復するなど、下旬にかけてはペソは堅調推移となり主要アジア通貨の中でも相対的な強さが見られた。

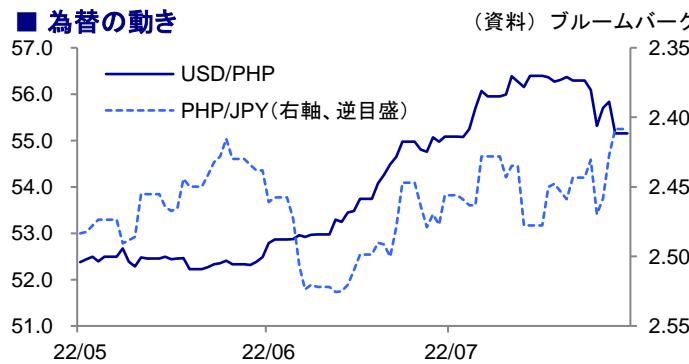
■今月の見通し

フィリピン中銀は段階的な利上げによる正常化の方針を示していたが、大幅緊急利上げを実施するなど、インフレ加速を抑制するためにより積極的な引き締めスタンスに変わっており、データ次第ではあるが年末までに追加で100BP程度の利上げが見込まれるなど、利上げ期待はペソのサポート要因となるが、大幅利上げによる景気への影響については留意したい。

また、米経済指標の弱い内容が景気減速を示しており、インフレに対して一部楽観的な見方が出ていることから積極的な米利上げ織り込みが剥落しているが、当面は米国は利上げを継続する見通しであり、ECBも利上げに舵を切るなど、世界の主要中銀による利上げによる世界的景気減速懸念から今後もペソなどの新興国通貨は下押し圧力が掛かりやすい地合いが継続するであろう。

経済活動再開を受け、輸入増加による貿易赤字の拡大やコロナ対策等、財政赤字の拡大は米国とフィリピンの金融引締めペースの違いによる金利差縮小に加えて、ペソ下押し要因となり今後もドル高ペソ安基調継続を見込む。

■為替の動き



■株価指数の動き



■先月の注目イベント

発表日	イベント	(資料) ブルームバーグ
上記参照		

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 78.00 ~ 83.00
INR/JPY 1.67 ~ 1.74

アジア・オセアニア資本部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは連日史上最高値を更新した】

78.99で当月取引を開始。前月は79.00を前にもたついたが、1日は朝方から難なく79を上抜け、史上最高値を更新。週明け4日月曜には地場輸出企業が大量のドル売りを出したことや節目79を超えた高値警戒感もあり当月の安値となる78.87を示現。しかしドルインデックスが20年ぶりのドル高水準を示す中、ドル/ルピーは翌日には高値を更新し、79.385まで上昇。インド中銀の利上げ期待に反し、世界的な景気後退懸念からインド10年国債利回りは6週間ぶりの低水準となる。またルピー安対策として、外国人投資家の債券投資に関する規制の緩和、インド国内における外貨ローンの規制の緩和を発表したことから様子見ムードとなる。

ただ二週目は前週末に発表された米6月雇用統計が事前予想を大幅に上回る結果となると、週明けから高値更新。その後もインド当局によるドル売り為替介入をものともせず、月曜から金曜まで毎日史上最高値を更新し79.96まで上昇。

三週目に入つてもこの勢いは衰えを見せず19日は大台80を超えて寄り付き。21日は当月高値となる80.07を示現。ただその後は直近1か月間でインドの外貨準備高が210億ドル減少していることが確認されると為替介入への警戒感が一段と高まり79台へと押し戻される展開。また金曜にはインド中銀総裁から不安定な為替市場は許容しないと発言。

四週目は7月FOMCでの利上げ期待が1.00%ptから0.75%ptへと下方シフトする中でドルが広く売られる展開にドル/ルピーも幾分上昇分を失う展開。迎えた27日のFOMCでは事前予想通りとなる0.75%ptの利上げが決定されたが、パウエル議長は会見で今後の利上げに関して弱気ともとれる発言をしたことからドルが一段安となるとドル/ルピーも79.80を下回る展開となり、79.755で28日取引を終えた。

■ 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは高値圏での推移を想定】

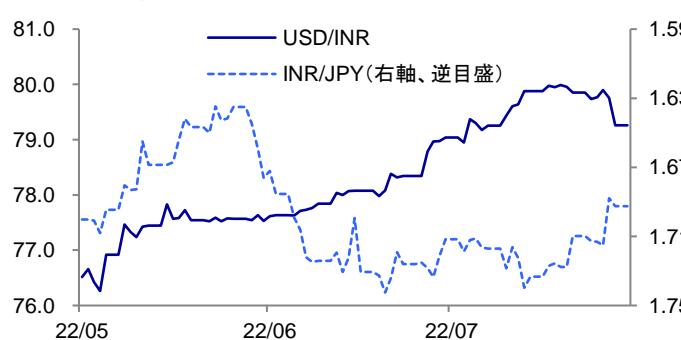
目下7月FOMC記者会見でのハト派とも受け取ることができる議長発言に注目が集まっているが短期的なものだと予想。結局のところ「インフレが収まるまでは利上げが必要」という従前までの認識に戻ると想定。また仮に、(そうなるとは思わないが、)米国経済がリセッション入りしているため利上げを諦める/近く利下げを行うといった転換をFRBが行ったケースを考えると米金利上昇自体は止まり対主要通貨で米ドルは安くならう。ただ米景気減速を背景にマーケットがリスク回避的な動きとなつた場合、新興国通貨売りとなり、単純にドル/ルピーの下落とはならない点に注意が必要だろう。

次に、従前ドル/ルピーを上昇させた要因として米金利と共に重要視されてきた点にインドの経常収支赤字拡大が挙がる。主たる要因は資源価格上昇による貿易赤字拡大で、実際7月発表されたインドの貿易収支は262億ドルの赤字と、単月で過去最大の赤字幅となった。直近の原油価格の推移を参照すると7月はブレントで100-110ドルでの推移となっており、6月の高値からは後退を見せた。よって貿易赤字圧力も幾分減退していると言えるが10ドル程度の下落では焼け石に水状態で貿易赤字拡大は避けられるとしても縮小には至らず、横ばいというのがいいところだろう。

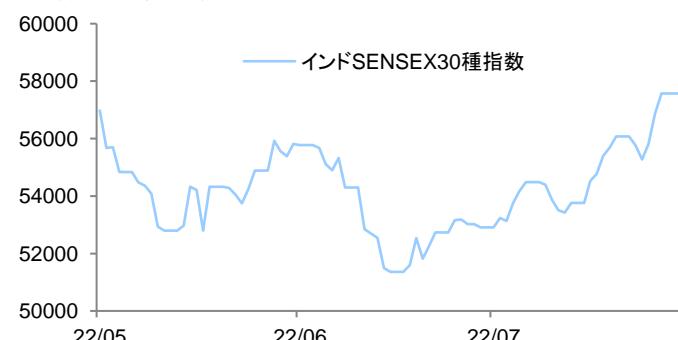
最後にルピー安抑止手段として為替介入に期待が高まっている。7月は80を超えたタイミングでインド中銀総裁が為替市場抑制に対して強い発言をしたことも注目を集めた。これにより、一段と為替介入観測が強まっている。しかし、見方を変えれば、去年11月から現在までのインド外貨準備高は700億ドル減少、一方でドル/ルピーは75から80へと大幅にルピー安となっている。つまりそれだけの介入を行つたにも関わらず止まらないルピー安に焦つて総裁がスピーチを行つたとも見える。為替介入は相場変動に対してバッファーになることはできても、変動を止めることはできないということを再認識したい。

よって8月の相場の注目点は米利上げ観測の推移。ドル/ルピーは現状高値圏での推移から米金利次第で上値を狙つていく展開を想定している。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	-	53.9	54.6
7/12	鉱工業生産	5月	20.80%	19.60%	6.70%
7/12	CPI	6月	7.10%	7.01%	7.04%

■ 先月の注目イベント

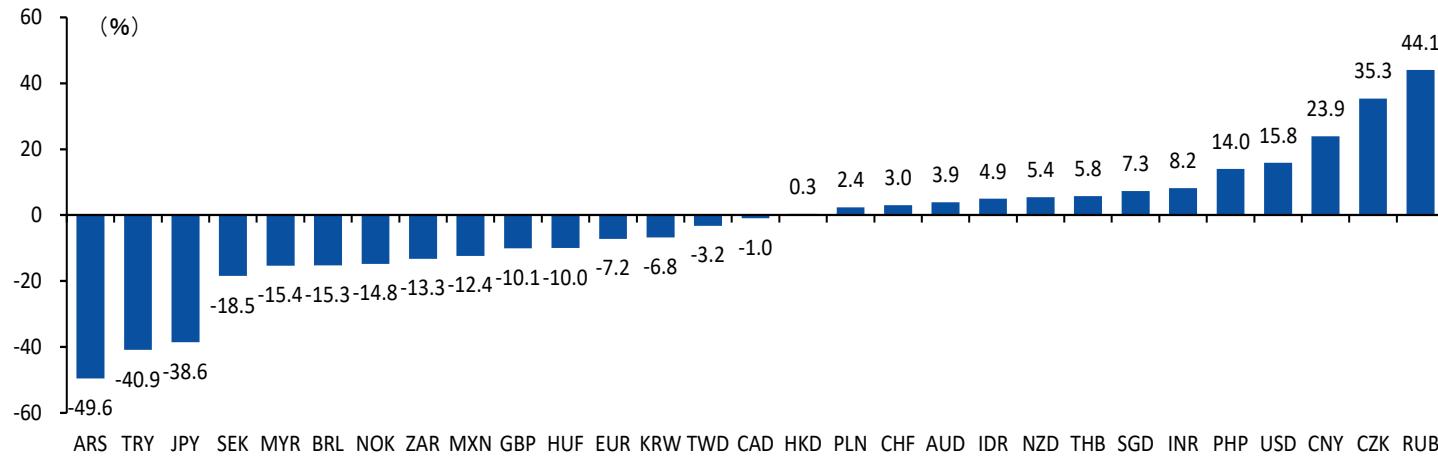
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	-	53.9	54.6
7/12	鉱工業生産	5月	20.80%	19.60%	6.70%
7/12	CPI	6月	7.10%	7.01%	7.04%

■ 為替市場・株式市場騰落率

為替市場	2021年末	2022年7月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年7月末	騰落率	USD換算
先進国								
米国	-	-	-	NYダウ平均	36338.3	32845.13	-9.6%	-
日本	USD/JPY	115.08	133.27	15.8%	日経平均株価	28791.71	-3.4%	-16.6%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	1.022	-10.1%	ドイツDAX指數	15884.86	-15.1%	-15.1%
英国	GBP/USD	1.3532	1.2171	-10.1%	ロンドンFTSE100指數	7384.54	0.5%	11.8%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.6985	-3.8%	S&P/ASX200指數	7444.642	-6.7%	-3.0%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.2795	1.3%	S&Pトロント総合指數	21222.84	-7.2%	-8.4%
エマージングアジア								
中国	USD/CNY	6.3561	6.7445	6.1%	上海総合	3639.775	-10.6%	-15.8%
香港	USD/HKD	7.7966	7.85	0.7%	香港ハンセン	23397.67	-13.9%	-14.4%
インド	USD/INR	74.3375	79.2625	6.6%	インドSENSEX30種	58253.82	-1.2%	-7.3%
インドネシア	USD/IDR	14263	14834	4.0%	ジャカルタ総合	6581.482	5.6%	1.6%
韓国	USD/KRW	1189.88	1299.34	9.2%	韓国総合株価	2977.65	-17.7%	-24.6%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.4508	6.8%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	-4.8%	-10.9%
フィリピン	USD/PHP	50.992	55.151	8.2%	フィリピン総合	7122.63	-11.3%	-18.0%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.3805	2.3%	シンガポールST	3123.68	2.8%	0.5%
台湾	USD/TWD	27.674	29.916	8.1%	台湾加權	18218.84	-17.7%	-23.8%
タイ	USD/THB	33.211	36.323	9.4%	タイSET	1657.62	-4.9%	-13.0%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2022年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	4.5	6.3	6.7	2.3	6.9	-1.6	-0.9	-3.4	5.7
日本*	7.2	-1.6	2.6	-3.2	4.0	-0.5		-4.6	1.8
ユーロ圏	-4.3	-0.9	14.6	3.9	4.8	5.4	4.0	-6.3	5.3
英国	-6.3	-5.0	24.5	6.9	6.6	8.7		-9.3	7.4
豪州	-0.7	1.4	9.7	4.1	4.4	3.3		-2.1	4.9
カナダ*	9.1	4.4	-3.1	5.3	6.6	3.1		-5.2	4.7
エマージングアジア									
中国	6.4	18.3	7.9	4.9	4.0	4.8	0.4	2.2	8.1
香港	-3.6	8.0	7.6	5.4	4.7	-4.0		-6.5	6.3
インド	0.7	2.5	20.1	8.4	5.4	4.1		6.8	6.5
インドネシア	-2.2	-0.7	7.1	3.5	5.0	5.0		-2.0	3.7
韓国	-1.1	2.3	6.3	4.1	4.4	3.0	2.9	-0.7	4.1
マレーシア	-3.3	-0.5	15.9	-4.5	3.6	5.0		-5.6	3.1
フィリピン	-8.2	-3.8	12.1	7.0	7.8	8.3		-9.5	5.7
シンガポール	-0.9	2.0	15.8	7.5	6.1	4.0	4.8	-4.1	7.9
台湾	5.3	9.2	7.8	4.4	5.3	3.1	3.1	3.4	6.6
タイ	-4.2	-2.4	7.7	-0.2	1.8	2.2		-6.2	1.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	21/10	21/11	21/12	22/01	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	2020	2021
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	6.2	6.8	7.0	7.5	7.9	8.5	8.3	8.6	9.1	1.2	4.7
日本	0.1	0.6	0.8	0.5	0.9	1.2	2.5	2.5	2.4	0.0	-0.3
ユーロ圏	4.1	4.9	5.0	5.1	5.9	7.4	7.4	8.1	8.6	0.3	2.6
英国	4.2	5.1	5.4	5.5	6.2	7.0	9.0	9.1	9.4	0.9	2.6
豪州								5.1		6.1	0.9
カナダ	4.7	4.7	4.8	5.1	5.7	6.7	6.8	7.7	8.1	0.7	3.4
エマージングアジア											
中国	1.5	2.3	1.5	0.9	0.9	1.5	2.1	2.1	2.5	2.5	0.9
香港	1.7	1.8	2.4	1.2	1.6	1.7	1.3	1.2	1.8	0.3	1.6
インド	4.5	4.9	5.7	6.0	6.1	7.0	7.8	7.0	7.0	6.6	5.1
インドネシア	1.7	1.8	1.9	2.2	2.1	2.6	3.5	3.6	4.4	2.0	1.6
韓国	3.2	3.8	3.7	3.6	3.7	4.1	4.8	5.4	6.0	0.5	2.5
マレーシア	2.9	3.3	3.2	2.3	2.2	2.3	2.8	3.4	-1.1	2.5	
フィリピン	4.0	3.7	3.1	3.0	3.0	4.0	4.9	5.4	6.1	2.4	3.9
シンガポール	3.2	3.8	4.0	4.0	4.3	5.4	5.4	5.6	6.7	-0.2	2.3
台湾	2.6	2.9	2.6	2.8	2.3	3.3	3.4	3.4	3.6	-0.2	2.0
タイ	2.4	2.7	2.2	3.2	5.3	5.7	4.7	7.1	7.7	-0.8	1.2

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	21/11	21/12	22/01	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	2020	2021
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
先進国										
米国	4.2	3.9	4.0	3.8	3.6	3.6	3.6	3.6	8.1	5.4
日本	2.8	2.7	2.8	2.7	2.6	2.5	2.6	2.6	2.8	2.8
ユーロ圏	7.1	7.0	6.9	6.8	6.8	6.7	6.6		8.0	7.7
英国	4.1	4.0	4.0	3.8	3.7	3.8	3.8		4.5	4.6
豪州	4.6	4.2	4.2	4.0	3.9	3.9	3.9	3.5	6.5	5.1
カナダ	6.1	6.0	6.5	5.5	5.3	5.2	5.1	4.9	9.6	7.4
エマージングアジア										
中国	4.0							4.0	3.9	
香港	4.1	4.0	3.9	4.5	5.0	5.4	5.1	4.7	5.5	5.4
インドネシア				5.8				6.0	6.4	
韓国	3.2	3.8	3.6	2.7	2.7	2.7	2.8	2.9	4.0	3.7
マレーシア	4.3	4.3	4.2	4.1	4.1	3.9	3.9		4.5	4.6
フィリピン	6.5	6.6	6.4	6.4	5.8	5.7	6.0		10.4	7.8
シンガポール	2.5	2.4	2.3	2.1	2.2	2.2	2.1	3.0	2.7	
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	4.0	
タイ	1.6				1.5				1.7	

(資料)ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 経常収支

	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2020	2021	
	(対GDP比%)								(対GDP比%)	
先進国										
米国	-2.5	-2.9	-3.2	-3.3	-3.5	-3.5	-3.9		-3.0	-3.7
日本	2.7	2.9	3.0	3.5	3.4	2.9	2.3			
ユーロ圏	1.4	1.9	2.6	3.1	3.1	2.5	1.7	1.9	2.5	
英国	-1.1	-2.5	-2.5	-2.6	-3.5	-2.6	-4.2			
豪州	2.0	2.6	3.2	3.3	3.8	3.5	2.9	2.6	3.5	
カナダ	-2.0	-1.8	-0.9	-0.7	-0.1	0.0	0.2	-1.8	0.0	
エマージングアジア										
中国	1.1	1.6	2.3	1.9	1.9	1.8	1.8	1.7	1.8	
香港	7.3	7.0	9.3	9.5	9.2	11.3	12.0			
インド	1.3	1.3	0.9	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	1.3	-1.1	
インドネシア	-1.3	-0.4	-0.2	-0.1	0.2	0.3	0.4	-0.4	0.3	
韓国	3.7	4.4	4.9	5.6	5.8	5.1	4.7			
マレーシア	3.5	4.4	4.5	4.8	3.8	3.5	2.8			
フィリピン	2.6	3.5	3.4	1.8	0.3	-1.8	-3.0			
シンガポール	16.6	16.8	16.8	16.7	17.0	18.1	19.8	16.8	18.1	
台湾	12.9	13.9	14.6	15.3	14.5	14.8	15.2	13.9	14.8	
タイ	6.3	4.2	1.7	0.7	-1.8	-2.2	-2.3			

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

	現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
		日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国							
米国	FFレート誘導目標	2.25-2.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2022/7/27	+75bp	2022/7/27 +75bp
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2022/7/21 現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.50	引き締め: 2022/7/21	0.00	2022/7/21	+50bp	2022/7/21 +50bp
英国	バンク・レート	1.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2022/6/16	+25bp	2022/6/16 +25bp
豪州	キャッシュ・レート	1.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2022/7/5	+50bp	2022/7/5 +50bp
カナダ	翌日物金利	2.50	引き締め: 2022/3/2	0.25	2022/7/13	+100bp	2022/7/13 +100bp
エマージングアジア							
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.70	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/1/20	-10bp	2022/7/20 現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.90	引き締め: 2022/5/4	4.00	2022/6/8	+50bp	2022/6/8 +50bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2022/7/21 現状維持
韓国	7日物レポ金利	2.25	引き締め: 2021/8/26	0.50	2022/7/14	+50bp	2022/7/14 +50bp
マレーシア	翌日物金利	2.25	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/7/6	+25bp	2022/7/6 +25bp
フィリピン	翌日物金利	3.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2022/7/14	+75bp	2022/7/14 +75bp
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2022/6/8 現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1 -50bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行